況』(ヘンリー七世よりヲオルヲ二世まで)及び "Introduction to the Literature of Europe in the 15th, 16th, and 17th, Centuries" (『十五十六十七世紀中歐洲文學概論』一八三七——三九)等の著あり。彼の政論は其の偏狹なるホイッグ派(改進派)の主義の爲に少なからぬ瑕疵を有し觀察はた冷酷に過ぎたれど憑據の精確と記事の明瞭とに至りては當時他に比なかりき。然れども其の文學史と文學的評論とに至りては頗る服すべからざるものあり。少しく異樣の題目又はやゝ把捉し易からざる人物を評論するに當りては一概に其の偏歪なる準繩を以て之れを律せんとしたるが爲めに酷に流れ淺に失し然らざれば乾燥となり讀者をして該人物及び題目の眞相を會せしむる能はざるの失あり。

(二) 井リアム、ロスコー(一七五三——一八三一) "Life of Lorenzo de Medici" "Life of Leo the Tenth" (『レオ十世傳』)の兩著は共に英國にてよりは寧ろ大陸にて愛讀せられき。ロスコーは熱心のホイッグ黨にして幾分か頑固の失なきにあらざりしかど其のギッボンの脉を紹ぎてよく歷史的精神の普及に資したりし功は沒すべからず。

(三) 井リアム、ミトフォルド(一七四四——一八二七)はロスコーよりは年長にして史學上の功績も亦た多く彼れに讓らず。ギッボンとは同僚にて共に熱心なるトーリー黨なりき而して政治上の主義を歷史に適用せし點はギッボンにも越えたり。是れ其の一生の大作 "History of Greece" (『希臘史』)に著大なる瑕疵ある所以なり而も當時行はれたりし希臘史中には之れに匹敵すべきもの絶無なりき。

ロスコーとミトフォルドとが斯く外國古代の歷史をのみ研究せりし間に二名の少壯史家現はれて國史研究の端を開けり。之れを

(四) Sharon Turner (一七六八——一八四七)及び John Liugard (一七七一——一八五一)とす。リンガードの歷史上の著は事實の精確と編纂法の熟練と自家が宗教主義に拘泥せざる公明と其の文章の雅馴とに於て空前の良著と稱せられたり。さてトルヲルは彼れに比して更に幾分の異彩あり其の文の美は遠くリンガードに及ばざれど英國史の研究に熱衷して陸續著しゝ史籍のうち『アングロサクソン史』(一千七百九十九年出版)は從前の史家が進むに躊躇せりし難境に歩を投じ邈焉たる開國の昔に泝りて雜然たる傳說の中より仔細に虛實の分野を討究し始めて一道の明路を開き來たりしものなり其の功勞は永く後人の謝すべき所なり。

(五)フランシス、パルグレーヴ(一七八八——一八六一)は英國古代史に關してトルチルの傳燈たり。"History of Normandy and England" の一書は一生の大著としても耻かしからぬものなり。パルグレーヴと相併びて

(六)Dr. Thomas M'Crie (一七七二——一八三五)あり蘇格土舊家派の史家として一方に雄視せり。チルタル、スコットが"Old Mortality"を痛罵せし評論の如きは固陋淺膚殆ど讀むに堪へざれども熱心の考察を以て蘇格土と英倫土との古史を調査してものせし "Live of Knox" 及び "Melville" の如きは價値ある著述なり。其他 Patric Fracer Tytler (一七九一——一八四九)の "History of Scotland" "Archibald Alison" (一七九二——一八六九)の "History of Europe during the French Revolution" Henry Hart Milman (——一八六八)の "History of Christianity to the Abolition of Paganism." George Grote (一七九四——一八七一)の "History of Greece" Connop Thirlwall (一七九七——一八七二)の "History of Greece" 等は皆こゝに記すべきものなるがマコーレー出でしまでに一時尤も令名ありし歴史家は彼のグラッドストンの師たりし

(七)トマス、アーノルドなり。"History of Rome," "Introductory Lectures on Modern History" 等の著あり又其の宗教文學の議論は當時尠からぬ勢力ありき。其の歴史は敘事の躰裁學術的にして取舍選擇よろしきを得たり。其の文亦明瞭にして遒勁なり。

マコーレー

マコーレー(一千八百年某月ソーストルシァに生まれ仝五十九年二月に逝りき)は當時の實際社會に於ける理想的紳士とも稱すべく種々の方面に於て偉人物たりし如く文學上に於てもまた第一流の地位を占めき。今便宜のため其の一生の著作を韻語論文及び歴史の三類に分つ。こゝに其の演說類を略せるは其の內容の政治に關する所多く文學には縁遠ければなり而も文章として之れを見れば他の論文よりもむしろ一層雄渾にして抑揚波瀾の妙に富めり特に老後の演說の如きは奇麗を求めずして威儀自ら備はりたり。さて以上の三者は何れも稀有の好評をもて迎へられしものなるだけに其の反動も亦甚だしく殘後程なく種々の批議を蒙りたり。中に就きて最も劇しく攻擊せられしは其の韻語の作にして博學卓識を以て第一に推されたりし批評家マッシュ、アーノルドの如きも彼の "Lays of Ancient Rome"(『古羅馬譚』)を甚だしく嘲難したりき。而して、韻語に對する此等の非難は

マコーレー恐らくは辭する能はじ彼れは勝れたる詩人にはあらざりしなり。彼れが思想は餘りに積極的實際的にして其言辭はたゝまりに明白(時としては露骨)なりき。詩として稍〻見るべきは其の最短篇(寧ろ世に知られざる) "Jacobites" "Epitaph" "The Last Buccaneer" 等なるべし但し其の譚詞(バラッド)例へば "Jury" "The Armada" 及び "Naseby" の如きは押韻嚴正にして字々金玉の聲あり意達し筆從へるの趣あり。而も彼れは到底文章家にして詩人にあらず其辭や其調や到底俗耳に佳なるものに過ぎず。天地人の神韻を歌ふが如きは彼れの能くせざる所なり。

詩に失敗せしマコーレーは散文にいみじき功を成せり就中其の論文の如きは同種類中古今稀れに見る所なり。『ミルトン論』の『エランベラ評論』に掲げられしやヂエッフレーは其の文の異彩あるに驚き稱嘆して曰はく君はそも那邊より斯かる文致を得來りしぞ」と。而してマコーレーの能文は決して偶然に成りし者にあらず彼れは大學に在りし間常に思ひを潛めて希臘羅馬の古文章を研鑽し傍らよく近世の名文章に注意し就中ギッボンとハズリットとに私淑し嘗て私かに二氏の眸を折衷し是れに自家特有の風致を加へ推敲方回して一篇の論文をものせりしとあり

そは故ありて公にせざりけれど是れは『ミルトン論』よりも數年の前に成りしものなりといふ。彼れは老年に至るまで當時の苦心を忘れず常に該篇を以て『ミルトン論』の上にありとなしにき。一生中に物せる論文の重なるものは『ミルトン論』『ソウシー論』『ピット論』『チャサム論』『アヂソン論』『ボーレス、チルボール論』『クライヴ論』『ヘスチングス論』『フレデリッキ大王論』『王政復古時代の劇詩家』『ボスエル論』『ハラム論』及び『ランケ論』等にして何れも皆殆んど同樣の得失を具せり。蓋し彼れが議論と批評とは兎もすれば岐路に走り本論の範圍外に亘る。人物又は著作を批評するや其の筆動もすれば本題外に走りて專ら自論を敷演するを例とせり。文學に對するマコーレーの所見は高尚深邃なるものにあらず隨うて俗海を拔きたる讀者にとりては著者が縷々の辯は偶々以て厭惡の資たるのみ。加之著者が博覽强記は往々にして其の著に累をなしき又其の過分なる材料準備は往々著者をして取捨に迷はしめき而してその弊殊に印度に關する諸論說に多しとなす。是れ其の論の概して散漫に流れ徒らに廣きに過ぎて深きに至る能はざりし所以なり。且や彼れの積極的なる如何なる難題をも疑問の姿のまゝに存し置く能は

ずして强辯以て其の斷案を得んと欲しき盡し彼れが眼より見れば如何なるものも不可思議ならず如何なる人物も兩面を有するとなかりしなり。其のスタッフォールドを「執念深き背敎者」と斷じスナフトを「稟才ある猶太人」と斷じベーコンを「大智ある凡骨」と斷じドライデンを「執念深からざる背敎者」と斷じマールボローを「貪欲にして悲智ある狗盜」と斷じたるが如き概ね此類なり。然れども彼れが文章には一種靈活の氣あり其見聞若しくは想像せし光景其の信ずる所の議論其の感ずる所の情念は最も明快なる文章によりてさながら讀者の肺腑に入る。彼れは此の明快に加ふるにスナフト、コッベット輩が企て及ばざる詞藻の豐富を以てせり故に其の文雄渾にして瑰麗暢達又平順なり而も是れ皆彫琢萬回の餘に成りしものなり。修史は彼れが老後の事業にして之れを試みんの志は既に少壯の時に遇れりしが當時は血氣尙旺盛にて目ざましき政治界の生活に心牽かれ加ふるに讀書述作の閑暇乏しく偶々筆を執るも僅に片々たる雜誌的論文に止まりしが其の印度より歸りしや家產既に成り心亦沈靜し加ふるに自ら多年政治界にありて內外朝野の事情を審かにするを得たりしかば此等知識を應用して前代の事情を觀察し重に政治的方面より國史を編成せんの念勃々として禁ずる能はず遂に彼の大篇"History of England from the Accession of James II"を成すに至りき。通觀するに流石に其が全學識を集注してものせる者なれば一見彼れが諸論文を集大成したるものゝ如く中にも第一卷は最も勝れたり。其のチャールス二世崩御後の英國の狀勢を敍せるや銳利透徹の史眼を以て從來の諸史籍傳記を博涉しよく事實の眞否を判別し錯綜混亂せる當時の社會を整說詳寫せる縱橫自在の筆は尠くも完全と稱するを得べし。但し著者が其黨派心を禁ずる能はで動もすれば或個人の爲に曲說强辯し要もなき些事に紙筆を費し竟にかゝる過大の冊子をなすに至りしは惜むべき次第なり。彼れがヰリアムを以て全く自己が理想の人物とし譬へば彼の灰白の紙を純白ならしめん爲めに其の周圍を黑塗するが如く彼れがヰリアムの反對黨(寧ろ自家の反對黨)を捉へて百方之れを讒誣したりしごときは弊の一例なり。さはいへど此の失は始終マコーレーに纏綿せりしにあらず黨派に關せざることを祀するや彼れは史家の公正を失はず秩序整々毎に一樣の熱心を以て仔細且つ明快に敍し去り敍し來り讀者をして親しく咯問するの感あらしむ。殊に彼れが其

の歴史中に文學の變遷をも併叙せしは多しとするに足る。思ふにこは英國に在りてはマコーレーに始まるといふを得べし。彼れは十分の注意を以て時勢と文學との關係を觀察せしのみならず彼の好古家若しくは風土記著者の如き熱心を以て親しく詩文人の生地を觀察し以て其の地勢風土の特質をも活寫せり。要するにマコーレーは英國紳士の好標本なり。彼れは多能多才當時の學問藝術殆ど通ぜざる所なかりき。たゞし抽象的なる數學と哲學とを好まず中にも哲學を無用の長物と貶し詩歌の妙を判ずるにも人情の微を察するにも悉く英明なる常識を以てせりき。然れども又よく他人の說を聞くを好み如何なる劇務にあるも寧て讀書を廢せざりき而して其の强記なりしはミルトンの『失樂園』を唪誦するにたゞ二回の通讀をもてしきと傳へたるによりて知るべし。彼れは終生無妻なりしが幼兒を愛すると人に超え其の甥と共に演劇するをこよなき樂みとなせりき。其自作の脚本は全く此の用にとて作りしなりき。又友誼に厚く一たび交れば必ず其誼を遂げにきされば人稱して全身悉く良性の人といへりき。平素大に都會を愛し山野を厭ひ愚人と惡漢とを惡めり。彼れは何れの時に於ても常に英國紳士を以て自ら居りしなり。

カーライル

如何なる時世を問はず謳歌すべき方面あれば必ず指彈すべき方面あり。第十九世紀前半の如きは此兩面の最もいちじるかりし時代なりマコーレーと共にカーライルの世に出でしは蓋し異しむに足らざる也。兩者は共に散文學上の偉人たりしのみならず政治上社會上の思想に於ても當時の最も進歩せる代表者なりき。第十九世紀前半に於ける英國の全世相は此の二人によりて始めて知ることを得べきなり。

トマス、カーライルは一千七百九十五年十二月を以て蘇格蘭土ダムフリースシヤアなる小邑エックレフェカンに生れ齡八十七にして逝りき。

カーライルは一千八百三十一年有名なる其著"Sartor Resartus"『衣服哲學』を世に出すころまでは尙一措大として江湖に浪々し毫しも名を認められざりき。この著は架空の獨逸敎師トイフェルス、ドロアクを一篇の主人公として盛に宗敎哲學及び文學に關する奇說を吐かしめたる縱橫自在の滑稽の間深刻骨に透る諷刺を寓

したる有數の奇著なり。はじめロンドンの書肆中一人も其の出版を承諾するものなく纔かに親友ロックハートの厚意によりて『フレーザル雜誌』に掲載せしが大聲俚耳に入り難く罵詈嘲謔の惡評は雨の如く下り中には彼れの文は句頭より讀むも句尾より讀むも全く同意なりとすら譏笑せしもありき。獨り只一面識の友たりしエマルソンは亞米利加に在りて大に之れを推稱し百方盡力の末始めて一卷の書として米國にて出版せしめたり。既にして世は漸く偉人の聲を解するに至りしかば爾後四十七年の間に彼れが最大作 "History of the French Revolution" 『佛蘭西革命史』をはじめとして有名なる "Heroes and Hero-worship" 『英雄及び英雄崇拜論』 "Chartism" "Past and Present" 『雜論集』『過去及び現世』 "Oliver Cromwell" 等をものしきかくて彼等が名聲漸く高く世人はた一作毎に其の意を理解するに至りしかば『クロムウエル傳』はじめて廣く歡迎せられ忽にして數版を重ねき。之をカーライルが著作の社會に好遇せられし初めとす。エクレフェカンの鶏措大は今や文壇の獅子王を以て目せられ一吼百獸を慴伏せしむるに至りき。其の他最も激烈なるスヰフト的諷刺(寧ろ叱咤)とも見るべき "Latter-day Pamphlets" 穩雅周細の文彼れが著作中稀れに見る所の『ストルリング傳』十四年間の苦心經營に成れる『フレデリック大王傳』等又皆噴々の稱を得たり。

カーライルが一生は決して幸福なりきといふべからず而して彼れと生涯を共にせし者もまた幸福なる能はざりしは事實なり。其妻エルシエが晩年人に向ひて天才の人の妻たることの不利不幸なるを告げ遂に其の夫に請ひて別居を求むるに至りしにても其の然りしを知るべし。按ふにカーライルは何人に對しても決して十二分の滿足を表する能はざりし人なり否大概の人に對しては嘲罵の口を衝いて出づるを禁ずる能はざる趣あり。さりとて其の人を嫌惡するや口にこそ嚴しく罵りたれ之れを行ひに實現せしことはなし。彼れは口を極めて社會の敗風を叱咤せしも尙ほ常に說敎者の資格と覺悟とを失はざりき冷嘲熱罵の底常に萬斛の熱涙を湛へたり。されば こそ世の漸く彼れを知り彼れが語を解するに至りしや初めは無意義の妄語の如く思はれしものもいつしか導世の箴言となり矛盾の怪說と見えしものも語逆理順の格言となり十九世紀の英國に於ける豫言者として有爲なる青年間に偉大の感化力を有するに至りき。而して此の反動は最

近二三十年間に至りて更に第二の反動を惹き起しカーライルが名聲は漸く其の重きを減じたりされどこは時勢の更に進歩して漸く其局面を一變せんとなせるに基くカーライルが功德の虛なりしが爲にあらず此の時勢の進歩に就きては後に說くべし。

豫言者としてのカーライルの功は姑く措き偏に其の文學の事業にのみ就きて觀るに彼れは所詮詩人たるよりはむしろ哲學者哲學者たるよりはむしろ批評家批評家たるよりはむしろ歷史家たりし人物なり。其の著述浩繁なれど其の半ばを占むるものは彼の三大著『佛蘭西革命史』『クロンエル傳』及び『フレデリッヒ大王傳』にしてこれは皆純然たる歷史若しくは詳傳体の歷史なり。其の他『シルレル傳』『ストリングン傳』は史と傳とを兼ねたるもの『サルトル、レザルタス』は自傳体の著作而して主題の多く文學的なる『雜論集』すらも大かたは史傳の質を有せり。例へば『英雄論』『過去と現在』の大部分『那威古代の諸王』『チョン、ノックス論』の如き是れなり。夫の政治上の議論を餘せる『ラーストデー、パムフレット』すらも凡そ一國の政事は其の歷史的事件に至大の關係ありといふ主意に基きて物したるものゝ如し。

個人の行爲は歷史を作り歷史は又よく個人を作る猶ほ一波の動いて萬波のつゞき起らんが如しとはカーライルが終始口にせりし所なり。さればこを彼れの文學を批判するや文學を單に文學として獨立的に批判せずして常に之れを史上の一現象として批判し且つかくせざる世の批判家等を難じたりしなれ。彼れは一方に於ては彼れの「上帝を忘るゝ者を憎みしと共に他方に於ては常に人間界の諸現象に注意して謂へらく「事件と事件との關係は父母と其の子との關係の如き單純なるものにあらず如何なる些細の事件といふとも皆過現時に起れる百般事件の結果にして此の事件亦た他の一切事件と相合して第二の事件を釀成す」。歷史は畢竟一團塊のみ人間史の上より見れば事件に大小の差別なし。要するに「歷史は新聞紙を蒸溜せるものに他ならず」と。されば彼れは能ふべく『人間史』を編せんの志ありしがこは彼の『フレデリッヒ傳』にすら前後十四年を費しゝ此の著者の到底成ずるを得ざる所なりき。但し之れを其の全著に徵するに何れの篇何れのページにも此の主義の影は現れたり。其修史上の抱負のマコーレーなどに比して頗かに遠大なりしを見るべし。彼れ既に斯かる主義を持して史傳を編めりき文致

はた此の主旨に伴はざるを得んや。彼れは謂へらく史上の出來事は成形の固躰(ソリッド)なり帳(カーテン)あり長さあり深さあり筆紙の記叙し得る所は線のみ線(ライン)は以て躰の各面をだに描く能はず況んや其内部と實質とをやと。於是彼れは其の叙事の躰に一機軸を出だし破格の筆を驅りて不羈奔放ひとへに事件を叙寫して餘蘊なからんことを力めたり。試に『佛蘭西革命史』を繙きて之れを見よ。忽ちにして鏘窓の鹿嫗忽ちにして野人ミラボー乃至其の父祖の狂行忽ちにして暴徒の嘯集忽ちにして南國の葡萄架。外國の關渉を叙しては列國公使の容貌態度得失に及び前代の盛世を論じては英雄事業の頽廢と不滅とに及ぶ。何れか先何れか後何れか主何れか客秩序あるが如く亦た無きが如く亦た無きが如し。テーン曰はく「知りて之れを讀めば身活劇場裡にあるが如く知らずして之を讀めば徒らに岑々たる頭痛を釀成するのみ」と。然りカーライルは該革命の活劇をまづおのが腦中に畫きいだし頭ゆらぎ目くるめくに及び咄嗟之れを筆に現じたりしなり。『クロンエル傳』と『フレデリッヒ大王傳』はた同一の筆法に成れり。冷靜なる史家の眼を以て觀察し愼肅なる史家の筆を以て徐に過去を叙述せんよりはむしろ炎々たる詩人的同情を傾けて全身を其の事件の爐中に投じ造化に代りて再び該事件を活現し以て後の讀者をして大人間史の一端を瞑々裡に看得せしめんとする是れカーライルが修史の理想なり而して其の文章の滅裂と險怪とは此の意に伴へる必然の結果のみ。

彼れが本領たりし歴史の特質は略々以上の如し。以下少しく彼れが人世に對する觀念を寛ふべし。テーン曰はく「カーライルは清淨教徒の隨一人なりと。而してカーライル亦た曰はく「清淨教主義は吾が所謂英雄主義の殿(最後の現象)なりと。然れども彼れは到底純粹なる清淨教徒にはあらざりしなり。其の信仰の根抵のあくまでも眞摯にして上帝を尊び永劫を忘れざる點はげにや清淨教徒の信じたりし所にひとしと雖も彼の嚴に己れを持するの餘り他を律することの峻嚴に過ぎ遂に甚しく情に悖り冷酷に趨るが如きはカーライルの惡む所なりき。彼れは詩人的熱情を以て衆に同感するを理想とせりき。清淨教徒は塵寰を穢土と觀じ人間を罪惡の動物と見一意上帝に奉事するを善となす。而してカーライルは謂へらく是れ豈に自然と人間との半面を限界する者にあらずや。德行高くいみじ

うして而も能く向上擴張の近世的精神を有し得べきにあらずやと。是に於てや彼れはゲーテが著を繙きて其の所信を固め其の疑團を釋きにき。清淨敎徒は曰はく「善を行ひ以て上帝に事へよ」と。ゲーテは曰はく「善美を併せよ一切を併せよ而して圓滿の人となれ」と。見るべし前者の峻嚴にして偏局し後者の自由にして廣大なるを。是れカーライルの覺に清淨敎主義以外に逸出せし所以なり。

カーライルが哲學宗敎に關する思想は獨乙の碩學に負ふ所多し。然れども彼れは抽象的に人間及び天道の解釋を求めんとせし者にあらず。ゲーテはカント、ヘーゲル等に比すれば其の說一段抽象的ならずと雖も尙ほカーライルとは趣きを異にす。ハリエット、マルチノー曰はく「ゲーテの廣大にして明光のある人生觀は晩年のシェークスピアのに同じく氣霽れたる時高きに登りて靜かに人界の景象を見渡すの概あり。カーライルの豫言者的運動は譬へば垢面敝衣にして雜沓紛擾の間を縱橫に馳驅するの趣あり」と。然りカーライルは君子に似ずして烈士に似たり然れども彼れもまた英國人なり其の世を罵りしは人をして正に向ひて猛進せしめんが爲めのみ。其の哲學を攷めしも智識の力を借りて世の迷妄を破し之れを啓導せんと欲せしのみ是に於てや彼れは一方には無限絕對を說き一方には差別實際を說けり。其の罵りしは愛せし所以其の現在を說きしは其の未來を說きし所以其の未來を說きしは其の現在を說きし所以なり。テーンが「衝突矛盾解すべからず」と評せし所以のものも蓋し此に存す。

夫れ英國第十九世紀の初期は有形無形の事物の一時に伸張せし時新生存の途の頓かに開かれし時農工商業の希有の勢ひを以て一時に勃興せし時なり。而して之れを奬勵し之れに謳歌せし者は彼のマコーレーなり。さもわれ人間は永く燦然たる外飾にのみ眩惑して其の當來と歸趨とを知らずして止むべきものにあらず。カーライルが終生の熱罵亦た以ありといふべし。

カーライル以後の歷史家

カーライルの歿後歷史界は一頓挫を來たし只纔かにフルードのありて舊全盛の餘光を傳へたりしのみ。さりとて修史の業の全く蔑廢せしにはあらず否マコーレー、カーライル等の蹤を追うて一生を史的研鑽に委ね種々の方面に於て史界を開拓せし者決して尠少といふべからず。左に最も有名なる者二三を擧げんに

(一)アレキサンダル、キングレーキ(一八一一——一八九一)は博覽强記考證の精を以て一時に冠たり。"Eothen"と題せる東洋漫遊記、"History of the Crimean War"(『クリミア戰爭史』)は彼れが二名著なり前者は文章の華麗を以て勝り後者は博引傍證所謂「恐るべき考證」の一例に屬す。但し著者は最も些細なる事件にだに能く其の相互の關係を發見し一々之を組織して有機的全身たらしむる技倆を有しき只惜むらくは一回の戰爭に一卷を費し二年間の記事に八卷を費せるが故に史としてはむしろ頗に過ぎたり。文脉も甚だ華麗にして流暢なるも往々にして新聞紙の雜報若しくは小說の如き文脉となり且つや自家が政治上の私見に泥みて記事に公平を失したる個處少からざりしは弊なり。

(二)John Forster (一八一二——一八七六)は多年『エキザミナル』記者として史傳の著に名あり殊に英國內亂時代の史に精通し"Arrest of the Five Members"を著はし傳記ものには『ゴールドスミス傳』『スヰフト傳』(未完)『ランドル傳』『チャケンス傳』等の著あり。又純文學上の考證に長じ、カーライル及びブラウニングの精通家として名ありき。此等の史家の中にて當時最も異色を呈せしは

(三)Henry Thomas Buckle なり。"History of Civilization"(『文明史』)は其名著也。著者はもと全歐洲の文明史を編せんの結構なりしが此の第二卷の出でし翌年に夭折せしかば完成せしは纔に英國の分のみなり。此の書の出でし當時は世間の好評甚大なりしが程なく反動生じて遂には不當の嘲罵をすら蒙るに至りき。此の書編述の躰裁は勿論文致論旨に至るまでも盡く純然たる佛國風の著にして着眼の奇警、觀察の精刻、叙事の明晰、議論の大膽など佛人中にてもテーヌを除きては當時殆ど比肩すべきものなかりしならん只勦もすれば粗放なる獨斷に流れ事件の關係を見ることあまりに直線的なりしが上に彼の佛人の口癖を學びて絕えず「英人は職工氣質の人種なり」など嘲刺せしを以て英國人の反感を招き非難攻擊一身に集りにき。按ふに公平なる眼を以て見るも獨斷の甚しき所多きは拒むべからざる事なり彼れが議論の憑據として引用せる事實は大概議論の奴隸たるに外ならざる姿あり。されど其着眼は流石に奇警にして發明する所尠からざるのみならず其の文章はた明快にして力あり殊に初學の讀者は知らず識らず吸引せられて卷を捲ふの遑なからんとす亦た以て史壇の名著と稱するに足るべし。

(四)エドワード、アウガスタス、フリーマン　はバックルと同年に生れて三十年の後に殘しき。文明史家としてはバックルに似たる點も尠からねど敎育好尙及び宗敎上の思想は兩者全く途を異にせり。(『ノルマン征服史』は其の一世の名著なり。他に "History of Sicily" (『シヽリー一史』)の未定稿あり。彼れは當時の史壇に於ける最も忠實なる學者なりき。其の所說の今尙ほ依憑すべきもの多きはいふを要せず史中に建築の變遷を附說せしなど彼れが創意として最も推稱せらるゝ所なり。フリーマンが文章の畫的なるは頗る憚ぶべしと雖も動もすれば爲めに冗漫に流れ厭倦を催さしむるもの少からず且つ其のあまりに多く隱喩を用ひたるは彼のマコーレーが聯句癖にひとしく叙說の躰を傷けて餘りあり。されど兎に角にフリーマンは當時の史界第一流の人たり殊に其十一二世紀の記事の如きは他の企て及ばざる所多し。フリーマンが門下彬々たる英材多し中にも其の翹楚を

(五)チヤルドグリーン　とす。あまたの著述ありし中に殊に "Short History of English People" (『英吉利國民小史』)は最も好評あり。グリーンは熱心に時人を導きて社會、文學、風俗、宗敎其の他百般の事に史的觀察を爲す風を養はんと勗めき。

此の希望は從前の史家とても抱けりしがグリーンの如く通常の方法を用ひて好結果を收めし者はなかりき。彼れは時人の耳に入り易き近代の思想に基礎を置きて古へを觀察し其の今日ある所以の偶然ならざるを明かにし趣味ある事實を引き來りて之れを證し加ふるにマコーレーぶりの瑰麗なる文を以て論叙し知らず〳〵の間に讀者をして時的觀察の趣味と利益とを知らしめき。又「一事史」といふものゝ編者に從ひ時代を逐うて國史の出來事を詳叙し數十篇を以て完結せんの豫定なりしも夭折せし爲めに縱かに "The Making of England" (『英吉利開國』) "The Conquest of England" (『英吉利克服』)等二三篇にして止みにき。

(六)フルード　カーライルの歿後歷史家として文章家として十九世紀後半の文壇に驍名を轟かせしジェームス、アンソニー、フルードは一千八百十八年四月ダルチントンに生れ仝九十四年に逝りき。一千八百五十六年 "History of England from the Wolsey to the Defeat of the Armada" の第一卷を編せしを始めとして "Short Studies", "The English in Ireland" (『愛蘭土に於ける英倫人』) "Oceana" 及び "The English in the West Indies", "The Two Chiefs of Dunby" (愛蘭土に關する歷史小說なり)等の著あり。

"English Seamen" は死後梓に上れり。

フルードが歴史編述の方法を見るに彼れは事實を精叙するを主とせしよりは寧ろ之れを論定するとに力めし傾きあり隨うて頗る物議を釀したりしが所詮彼れをしてかゝる体裁を擇ばしめしは半ばは時勢の然らしめし所なり。夫れグローート、マコーレー及び晩年のカーライル等が當時の讀史界に歡迎せられし主なる理由は事々件々を精細詳確に叙説したる點にあり而してかゝる精細詳確なる叙説は多年間の精勵の結果なりとして稱歎せられき。然るにフルードの事を叙するや之れに比ぶれば遙に粗なり而も其の議論を行るや更に密なり是に於て輕斷なる讀史界は臆測すらく其の力むる所疑ふらくは少なかるべく其の推斷臆測に成る所恐らくは頗る多かるべしと。さもあれ其の實フルードは彼の三史家に比すれば自己の私見持論を以て人物事件を褒貶することは却りて少なかりしなり。而も其の長所は敵の爲には缺點と思惟せられ中立者の爲には可不可なきものと見られたり。所謂長所とは何ぞや。熱心堅固なる愛國者にして能く自國の長所を看取し之れを推奬せしこと其の一なり。よく歴史の眞義を會得し事實の取捨概ね其の宜しきに叶ひしこと其の二なり。按ずるに古今史家多しと雖も單に事件を年代的に錄して能事畢れりとなせる者多し隨うて其の記叙するや典據は正確に考證は該博なるも記叙に生氣無く往々にして宛も事實の臚列に止るもの比々是れなり而してよく此の失を脱し活寫の妙を兼具せる者古くはシウシヂヽーズありヘロドタスありクラレンドンありギッボンありカーライルあり而してフルードの如きは尤なる者の一人なり。さてまた第三の長所は其の文致の雅馴と明快となり。彼れが文章はマコーレー、キングレーキ若しくはラスキンの如き瑰麗を以て勝るものにあらずされど氣品俗を脱し平淡一奇なきが如きうちに衆妙の躰を具へ貫くに一片靈活の氣を以てす「十九世紀後半第一の妙文」たるを失はずといふべし。

テニソン

第十九世紀後半期の詩歌は之れを彼の純文學の極盛期たりしエリザベス女王朝若しくはアン女王朝の詩歌に比するに種々の點に於て毫も遜色なきのみならず觀念の深邃といふ點に於ては寧かに兩者に超越す。夫の辭句の華麗と結構の纖

巧とを以て特色とせしアン女王朝の詩歌が其の觀念に於て見るべきもの乏しかりしは更にもいはず彼の情熱と創新とを以て勝れりしエリザベス朝の詩歌とても其の形而上の想念は概して卑しく若し其の詞句の上に見えたるを標準とすればスペンサル一人を除くの他は重に人情の浮沈を歌ひ人事の成敗を歌ふに止まり未だ天地人の究竟問題に觸れ人事最奥の消息に接し之れを咏歌することは殆ど無かりき。蓋しかゝる問題は當時の社會のいまだ留意せざる所なりしなり。

降りて十九世紀に至れば時運の大變動は人々の思想を刷新し來り人皆外界の昌平に知足する能はずして反省的となり顧慮的となり競うて生存の大問題を講ずると共に過去將來を推度して處世の方針を定め安心立命の地を作らんと欲しき隨うて詩人はた此の風潮に化せられ其の多涙多感の性に驅られ率先して遐般大疑問の解釋を與へんとせり。是に於て彼等は思ひを凝らし心を潛め哲學宗教の問題に亘りて其の抱懷を抒し其の漸く覺悟する所あるや更に其の聲を高うして慰諭の福音を歌ひたり。彼等はもはや舊詩人の如く單に自然美を謳歌する者にもあらず又單に人情を咏ずる者にもあらずはた又單に自家一身の興感咄嗟の哀樂を吟哦する者にもあらず否仔細に人生の秘機を察し煩惱の由來を概念しさて後ち靜かに筆を採りて且つ批判し且つ同感しつゝ作せしなり。是れ其の片言隻句の深邃なる觀念を藏する所以なり。

新詩風の一先驅として又其の代表者の隨一として眞に錄々の名あるものをアルフレッド、テニソン卿となす。

テニソン(一千八百九年八月リンコオンシアなる一村サマルビーに生れ同九十二年十月逝りき)の詩集中の金玉の響を有するものゝみを擧ぐれば "Poems, Chiefly Lyrical, by Alfred Tennyson" (『抒情詩を主とせるアルフレッドテニソンが詩集』)中の "Ode to Memory" (『記憶に寄する長歌』) "The Poet's" (『詩人』) "The Poet's Mind" (『詩人の心』) "The Deserted House" (『廢屋』) 及び "The Sleeping Beauty" (『睡美人』) の如きは作者が前途のいよ〳〵多望なるを示し且つ其の傑作なる眞相をも現ぜり。(此の中『睡美人』は何故にや後の詩集には省かれたり』。 "Poems by Alfred Tennyson" 『アルフレッド、テニソン詩集』中の "The Lady of Shalott" (『シヤロットの妖姫』) "The Miller's Daughter" (『磨者の女』) "The Palace of Art" (『美術殿』) "The Lotus Eater" (『無爲

の島人』 "A Dream of Fair women" (『衆美人の夢』) 及び "Ulysses" 曰はく Loves and Duty" (『戀と義』) 曰はく "The Talking Oak" (『解語の槲樹』) 曰はく "Godiva" 曰はく "The Two Voices" (『二聲』) 曰はく "The Vision of Sin" (『罪業の夢』)。(就中『二聲』と『罪業の夢』とは當年のテニソンを表現するものとして最も留意すべき價値あり殊に前者の如きは「十九世紀のハムレット皇子が獨白」と稱せられたり) The Princess: A Medley (長篇の物語歌) "In Memoriam" 等なり。

是れより先時の桂冠詩宗ヲルヅヲルス卒して其の後を襲ぐ者なし。テニソンとエリザベス・ブラウニングとは其の候補者として推されたりしが多少の動搖の後ち輿論はテニソンに桂冠を捧げき。此の決定に與りて最も力ありしものは其の近作 "In Memoriam" の好評なりきとぞ。

驀きにテニソンの祖をキーツなりといへるセンツベリは更に二詩人を比照して言く「或人は英國詩風の傳統を論じてテニソンを以てキーツに紹ぐものとなす。思ふに不當ならじ。テニソンが一千八百三十年及び同三十二年に出だせる詩集中其の圓熟なる作は皆てキーツが新舊兩派の風調を折衷せる清新の諧音あると共に時に此の折衷の不熟の躁音を有せしこと彼のキーツが "Grecian Urn" 及び "La Bella Dame Sans Merci" に見ゆるものと正さに相同じ。然れども正當に兩者を比較すれば(物の比較ばかり誤解せられ易きはなけれど)其の相異或は顯然たるものならん而も兩者もとより大詩人たるに於て擇ぶ所なきは言を俟たず。キーツの短命なりしや其の作未だ圓熟に至らずして止みきと雖も彼れをして若しテニソンが例の十年間に爲しゝが如く其の作を自ら批判していろ〳〵修錬琢磨する餘裕あらしめば其の作必しもテニソンに下らざりしならん。げにもキーツが初期の作の幾分は當時の批評家も既に難ぜしが如く一氣にして千言立ちどころに成れるが爲め概ね無辭巴調に止まり好尚も觀念も粗雜淺薄なりしことテニソンが初期の作よりも甚だしかりしならん而も感情の精緻といふ一點より之れを見ればテニソンが作中一としてキーツが傑作に及ぶものなきにあらずや、要するに兩者の類似は爭ふべからず彼れ等は共に繪畫的表現と音樂的表現とを併用する妙技を有し彼等は共によく人道を解し普通の事物にも亘りて靜穩に平直に且つ健全なる觀察を有せりき而して此の點に於ては彼の實際界を離れ現世間を無視

せりしシェリーに勝りしこと一等なりと。兎に角にテニソンが初期の作のキーツのに比して敢て卓然たる能はざると其の詩風に多少の類似あるは爭ふべからざるは事實なれば此の點より見てテニソンの系脈をキーツに求むるは必ずしも不當ならじ。されどテニソンがテニソンとなりて生れしは寧ろ時潮の必然に因りしものと見做さんかた一段の至當なるべし。一言すればテニソンはキーツが子にはあらでキーツと同腹の弟なり。而してテニソンの好尚はキーツに比すれば少時より一段多方面にして其の進前の歩武はたキーツよりは確實なりき否此の點は實にテニソンが衆詩人に卓出する一特徴たり。彼れは詩人の天職と自己の天才とを認識し古人の名作を讀むも曾て之れが爲に逡巡し若しくは眩惑することなく寧ろ其の短所及び不熟の個處を發見して深く自ら警めたりき。加ふるに彼れは詩人として夥多の長所を有せしかば其二期の作は初期のよりも三期の作は二期のよりも年を追うて精微高妙の域に進めり。按ふに繪畫的にして音樂的なることは詩技の上より見て極致とする所何れの時の詩人も之れに到らんと場めしは明かなる事實なり。されど能く其の目的を遂し得し者を敷ふれば英國

古今の詩人中たゞ四五指を屈すれば足りぬべし。成熟期のテニソンは實に其の隨一人たり。加之彼れは其の先進が繁詞を以て歌ひしもの(例へばチルヅオルスが『エキスカルシヨン』の如き)を醇化して短篇となし無限の情致と幾多の變化とを盡し其の言々句々をして讀者の心腑に沁せしむ。この點に於て彼れに匹敵すべきものは古今其の人多からざらむ。スペンサルが『宮殿』及び『夢』の二篇はやゝ遒般の趣致あり、キーツ、シェリー、コールリッヂ、ブレーク等も時に此の技を試みたりきされどテニソンに匹敵すべくもあらず。且つや "Oethone" の律調壯大なるは彼の山海の如きミルトンが無韻律語をも凌ぎ "The Lotus-Eater" の荒唐にして雅遒なるは彼の夢裡の天樂に比すべきスペンサルが『神女王』にも讓らず。

テニソンが時代の精神を歌ふや二樣の方面よりせりき自然界を主觀的に歌ふこと、十九世紀の精神に立脚して過去の事蹟を歌ふこと、是れなり。前者の可憐なる情致はチルヅチルスより得て尙彼れの如く乾燥ならず後者の華麗と濃厚とはスコット、バイロンより來りて尙彼のごとく淺露の失なし。蓋し彼の三詩人は嚴密にいへば其の思想も感情も到底テニソンの如く十九世紀的なる能はざりしな

り。

テニソンが老成期の初に出でし作二篇あり"The Princess"及び"In Memoriam"是れなり。是れ等の作に至れば單に彼の詩形と感情との調和若しくは繪畫的樂音樂的などいふ點に妙あるに止まらず其の思想の根柢に此等の技巧以外に從容自若たる覺悟あるものゝ如し。二篇のうち前者はいさゝか滑稽の趣味を加へたる長篇の物語歌にして作者が苦心の作なり其の滑稽の如きは成功とはいふべからざれど兎に角に傑作の一たるを失はず。後者は溫厚誠實なる著者が情相のあらはれたると共によく當時の或思想を歌ひ得たる作なり。或思想とは彼の半懷疑的宗教思想にしてテニソンは所謂「自由的保守主義」の人(否な寧ろ保守自由の間に彷徨せし人)なりしなり。次に此の期の作"Maud"は辭句の詩的といふ點より見れば彼れが作中第一に位するものにはあれど詩として全躰に亘りて之を見れば情理風韻兩つながら前の二篇の下にあるのみならず彼の"Spasmodic School"(際物派)と競爭して筆を際物に染め爲めに神聖なる詩人の風格を損ぜんとするに至りたりテニソンはた此の失を自識したりしが如し。さて此作に比すれば"Idyls of The King"は部分の妙味と共に全躰の興趣を存し辭句はた例によりて精錬識者をも悅ばしむるに足り俗衆をも悅ばしむるに足る。無韻律語の作中ミルトン以來稀に見る所今日に至る迄も前には只トムソンが作"Seasons"の稍々同種の面影を傳へ得たるあるのみ。

テニソンの多才なるや其の作せし所一樣ならず山野の風物に關係せる物語歌あれば幽玄深邃なる哲理に關係せる瞑想の作あり古代の詩歌より飜譯せる軍歌もあれば寫景狀物を主としたる作もあり。又尋常の抒情歌あり又純然たる劇の詩あり。就中狀寫諷詠の趣致はゆたかに當世紀を代表するに足れり。但し其の劇の詩は寧ろ其の短所を示せるものなり。第一科介の妙乏しく第二篇中の人物に彼のシェークスピアに見るが如き宛然たる入神の妙無し。所詮テニソンは抒情狀景の巨擘兼ねて物語歌の妙手なり。按ふに英國の詞壇古來名家に富めりと雖も自ら詩人の天職の神聖なるを意識して十年一日の如くに忠實に熱心に眞摯に勇猛精進片時も其の理想を忘れざりしものは果して幾人かありし。其の理想テニソンの如く其の精勵テニソンの如く其の妙技テニソンの如くして初めて十九

世紀の詩人たるを得べし。十九世紀の英國がテニッソンを好遇せしは至當の禮儀なりと評すべき也。

終りに一言すべきは彼れと時勢との關係なり。テニッソンを豫言者的詩人と稱せんは溢美なれど毎に當代を代表せりといふ稱は何人も否拒せざる所ならん。蓋し彼れが作には毎に宗教上道德上社會上すべて此等の問題に關する當時の進歩せる輿論の影映れり。勿論嚴にいふ時は彼れが歌へる所は必ずしも當年最勝の思想にわらず最も創新なる思索最も進歩せる想念にはあらざりしなるべし而も其の作に見ゆる所は當時の眞相を反射せるもの最も聰明なる英國人全躰の最近年に於ける修練と經驗との結果苟も當代の聰明者が自家の影なりしとして首肯せざるを得ざりし者なり。或は一歩を讓りて晩年のテニッソンにはもはや英人の理想見えざりきといふ批評を眞なりとするも少くとも其の壯時のテニッソンは新しき思想の謳歌者にして時には新理想の皷吹者なりき。例へば一千八百四十二年に出だしし『ロクスレー、ホール』を見よ彼れは人物の口を借りて自家の感慨を抒らし更に轉じて將來の期望を歌へり而して是れ明かに時の改進派の希望なりき。尚後年に及び『六十年後のロクスレー、ホール』を著はして時の保守派が抱ける思想と疑惑とを歌へる或は又 "Princess" が當時の新問題たる女權論の旨に密接せる若しくは『美術殿』が當代の一弊たりし出世間熱の誤謬を諷刺し暗に眞善美の相關を說き世間と出世間との關係を歌へるいづれか吾人の此言を證するものならざるべき。何れもテニッソンが理想の影にしてまた當代思想の影にあらずや。要するにテニッソンが終生の理想は天法を畏敬するに在り精進を推奬するにあり秩序を亂さずして進歩するにあり義理を重んじつゝも人情を重んじ平等を愛しつゝも差別を愛し出世間に遊びつゝも現世間に處するにあり。(是れカーライルがゲーテに於て其の實例を見たるを喜びしものと相近し。)而して其の平生の行實も頗るよく此の理想に副へりしに似たり。テニッソンの如きは思ふに詩人中の君子人たるに近かるべし。

ブラウニング及びブラウニング夫人

テニッソンと世を同うして更に清新なる感情更に深邃なる思想を謳歌し遂にテニッソンを凌ぐの名あるものをロバルト、ブラウニングとす。一千八百十二年五月生

れ仝八十九年に逝りき。其の齢二十二歳の時はじめて"Paulin"と題したる詩篇を著す。ブラウニングが作に終始附隨せし一種の缺點は既に此の作に表はれたり而して其の傑特の詩才は未だ之れを認むるに由なかりき。此の篇に顯れたる特質は凡そ三あり。第一。詩句の悉く劇白の躰なること。第二。長き疊音(シンコペ)の語の目立ちて多きこと。第三。彼れが作の特色と稱せらるゝ"晦澁"の甚しきこと是れなり。此の中第一と第二とは別にいふべきことなし但だ何が故にかゝる奇異なる劇詩躰を用ひしか審かならざるのみ。さて所謂晦澁の失は寧ろ一氣呵成を要とせし結果なるが如し即ち情の向ふ所やがて之れを筆に傳へ殆ど辭句の選擇をなさず偏に氣に任せて作せしが爲めならんか。要するに此の『ポーラィン』は推稱すべき作にはあらざりき。後ち二年を經て"Paracelasus"といふを著しぬこは前作に勝る數等同じく劇白躰の詩なりしが對問の呼吸圓熟し(到底上場の見込はなけれど)傾瀉するが如き急調と疾驅するが如き一氣呵成とは其の無韻律語の特質を成し蕪雜險晦の瑕疵あるに拘らず隱然一種の靈氣を具へおほろげながらも作者が特得の美感を傳へたり。要するに此の作は詞致に尙調はざる處ありて後の作に見るが如き莊嚴の妙はなけれど抒情詩としては獨創の一躰にして眞に新詩人の初作たるに愧ぢざるものなり。而して世間の之れを遇するや冷々たりしがブラウニングは敢て其の詩躰を改めんともせず又二年を經て其の友某の爲めに"Strafford"といふ正劇を作せり。此の作妙處乏しきにあらねど如何にせん其の思想例の如く時世に超越し其の表白はた含糊なりしが爲めに之れを讀み物とせずして演ずるものとするときは興味索然たらざるを得ざりき。後ち又三年にして"Sordello"といふ劇を作しぬ此の作取りわけて異色を帶びたりしかば宮に俗衆に悅ばれざりしのみならず平生ブラウニングを愛讀する輩すら此の作者遂に其の作詩の方針を誤らんとするに非ずやと危みにき。かゝる疑惑は後"Bells and Pomegranates"と總題せる詩集出づるに及びて跡を絕てり。此の集中の劇詩にも例の缺點は作へりしが奇異なる"Pippa Passes"を除くの外は必ずしも讀者をして茫然自失せしむる底の異質あるに非ず而して其の抒情的短篇の或作に至りては優かに其の作者の單に語るに堪ふるのみにあらで歌ふにも秀でたる由を證したり。按ふに一千八百四十六年は彼れがはじめて大詩人の列に入りし年なり。同年エリザベ

ス、バーレット嬢を娶りて妻とすテニッンと桂冠詩宗の選を爭ひし令名の女詩人ブラウニング夫人といふは是れなり。結婚後ブラウニングは伊太利に遊び一時フロレンスに居をトし妻の逝りしまてはかしこに在りて "Christmas Eve and Easter Day." 及び "Men and Women" の二篇をものしぬ之れを既刊の二詩集即ち "Balls and Pomegranates" 及び "Dramatis Personae" と併べ稱してブラウニングが壯年期の傑作を蒐めたるものとなす。かくて一千八百六十九年無慮二万餘句の長篇を著しぬ題して "The Ring and the Book" とゝへり這は四卷に分ちて出版せられ大に世に歡迎せられき。是れ或はたゝへてブラウニングが傑作となせる異躰の叙事詩なり。然れどもブラウニングは一時の虛譽に眩惑して濫作するの愚なるを覺り退いて筆を作詩に絶つこと十有四年此の間ひたすら精神を修養し或は人生の大問題を攻究し或は希臘の古詩歌を玩味しさて一千八百七十一年に至り再び詩壇にあらはれたりブラウニングが名を不朽に傳へし作は蓋し是れより後に出てたり今其の名あるもの多き中にて晩年の作中『アソランドー』は二十五年にものせし "Dramatis Personae" 以來の名作と稱せらる。總じてこの期の作には異樣の無韻律語を用ひ普通の話説躰と劇詩の獨白躰とを相交へたり。この獨白躰はブラウニングが終生棄てざりし筆致なり。

ブラウニングが作の是非は今尚ほ全く確定するに至らず況んや當年に於てをや。其の中年以後二三の聰明なる批評家は彼れが作の美を看取せりしが多數の讀者は蕪雜、粗笨、險晦、含糊等の非難を挿みて一概に彼れを斥けたりき。或は附和して褒稱せし輩あるも只漠然と其の清新の致を認めしのみにて眞に何れの個處に妙あるかを明知せざりしが故に世間多數の嘲罵非難(就中大學出身者の劇しき攻撃)に對しては作者を回護するの辭を知らざりしなり。所詮當時のブラウニング黨が勢力はいと微弱にして啻に世間に向ひて十分にブラウニングを推擧する能はざりしのみならず自家はた其の妙を會得する能はざりしなり。然れども彼れが作も追々に世に出て十年二十年を經過するにつれて世間の非難もまた舊の如く頑ならず又其の景仰者も漸く其の所信を固め文壇の一隅に所謂ブラウニング社を起し一千八百八十一年には公然ブラウニング研究會といふを組織し入會者には其の趣意書を交附して贊成の意を表せしめ且つブラウニングが特殊の辭句譬喩等

を解するが爲めに『ブラウニング辭典』を編するに至りぬ。崇拜者の運動是の如くなりしかばブラウニングを撲斥する輩更に起ちて反對運動を試みこゝに再び批評海の一大波瀾を捲き起しき。さもあれ虛心にして彼れが作を觀るにブラウニングは圓滿の詩人とは稱すべからざるも偉大の詩人たると爭ふべからず其の缺點は其の詩の形にありて其の內容に存せざればなり。

論者曰はく新詩人中の新詩人たりしブラウニングの如き作家には多少の破格も許さゞるべからず時尙に先だてる思想は時尙の言語のみをもて表しがたければなり。其の晦澁を以て難ぜらるゝも止むを得んや。カーライルが散文も嘗て晦澁の譏を得たり散文既に然り況んやカーライルよりも更に幾歩をか進めたる新思想新感情を新韵の詩歌に表はすに於てをやと。是れ今のブラウニング黨の所論の要たり。然るに他の論者は曰はく所謂新詩人は平順の語を以てしては其の情思を表現する能はざるか。詞意の險晦は技の足らざるに因するにはあらざるか。テニッソンが或作の如きは雅馴穩健の詞致をもてして能く時尙に先だてる感想を歌へるならずや。所謂新詩人は何故に通常事を歌ふ場合にだに晦澁險怪なる語を用ひざるべからざるか云々。是れ非ブラウニング派の今尙主張する所なり。淑ぶものは缺點にだに和し難ずるものはひとへに其の短を擧げて其の長を蔽はんとす。ひとり其の兩端を叩かん者にして始めて能く事相の眞を知るを得べき也畢竟ブラウニングが是非の由來はテニッソンの對照に基く所多しテニッソンが典雅渾成の筆と相比して其の晦澁の一層きはだちて見られたりしに因る。又其の格外に賞揚せられしは其の思想のテニッソンのに比して遙に高遠なりしと同時にテニッソンに對する社會の歡待のあまりに甚しかりし反動なり。いづれにもせよブラウニングが運命は彼のバーンス、キーツ若しくはチルヅチルス、シェリーに比すればむしろ幸ひなりきといはざるを得ず彼れは其の存生中に十二分の景仰を得たればなり。

彼れが詩篇は其の形の上より見るに概して律呂と押韻との調諧なきものにして其の詞の如きも往々にして滑稽劇の人物の白の如く或は電信用の文句の如く簡に過ぎて義をなさゞるが如きもの多し。言語を思想の符號とせば彼れが語は更に他の語の符號たりしなり。讀者が其の長篇を厭ひて重に其の短篇をよろこび

しは洵に所以あり。加ふるに彼れは詩中に於て或は「人心の解剖」を行ひ或は哲理上の議論を試み而して之れを行るに生硬若しくは險晦なる言辭を以てせしかば讀者はいよいよ其の解に苦みたり。彼れが作に對しては「質を減し文を加へよ」と求めざるを得ざるなり。さもあれ彼れが詩に一種いふべからざる情趣ありて知らず識らずの間に人を魅するの力あるはドライデン以後空絶と稱すべし。且や心理上の研究を利用して悲哀と滑稽とをほしいまゝにしたる技倆ジョークスピヤ以外殆ど空絶なり。又其の劇詩は舞臺上の技術を缺きし爲めに實際の脚本作家としては殆ど稱するに足るものなかりしも人物の性格を活現する技倆は頗る歎美すべきものあり。又其の自然の風物を歌ふやヲルヅヲルスの如く精妙ならざりしも其の不羈宏恢の氣象ある點は殆ど何人も彼に及ぶ能はじ。要するにブラウニングは之れを抒情詩人として見れば最高作家の一人なり。彼れは悲哀の歌を能くしまた戀愛を歌ふに巧みなりき。總じて短篇に其の最長を見る。中にも "Asolando" に收めたる六篇の如きは聲調といひ色彩といひ思想といひ共に頗る見るべきものにして "Pippa Passes" に收めたる諸篇の如きはた抒情詩中醇乎として醇なるもの彼のテニソンが夢幻的作物と相對して一代の珍たり。

ブラウニング夫人エリザベス、バーレットは夫よりも六歳の姉なりき又其の名聲は普通の讀詩社會には一時は夫よりも高かりき。

ロバルト、ブラウニングがもてはやされしは夫人が歿後なり其の生前にはバーレット女史あるを知りてブラウニングあるを知らざりし者も多かりき。高遠なる詩人としては女史の其の夫に及ばざるや明かなれど夫人また英國の女流詩人(抒情詩人)としてクリスチアナ、ロセッチ女史を除きては前後及ぶものなき技倆を有せり。其の詩殊に晩年の作)は夫ロバルトの詩風を學びたるが爲め詞句の意義不明なる所少からねど尙ほ其の夫の如く甚しからざりしのみならず間々其の朦朧たるが爲めに神秘的感情を寓し得たることあり而して其の少時の不幸と多病とより來れる悲哀の感想は屢々可憐巧妙の詩となりて其の愛讀者を泣かしめたり。蓋し(一)其の至誠なる宗教心はよく其の作品を高からしめ("Cowper's Grave" は其の好例)(二)其の博愛慈悲の主義はフッドが作ヂッケンスが作と呼應し ("The Cry of the Children")(三)其の女性の特技は其の家庭的切哀を寫すにあらはれ ("Isobel's Child")

(四)其の傳奇的空想("The Duchess May" 及び "The Brown" "Rosary")と(五)其の倫理及び政治の思想("Lady Geraldine's Courtship")はた讀詩社會の愛を博しき。其の詞の選擇は間々宜しきを得ざりしかど尚創新の譽れあり。其の悲哀を叙するや女子の癖としてやゝ饒舌に流れたる所もあれど眞實と純粹とを失はずして句々能く人を動かす。而して自然の風物を歌うて繪畫の如き妙ある當時テニソンを除きては敵するものなかりき。さて夫人が十四行詩に至りては遠くテニソンの上にあり其の夫に送れる "Sonnets from Portuguese" の諸篇の如きはシェークスピア以後十六七世紀の名篇と伯仲の間にありと稱せらる。但し夫人が作に一大缺點ありそは女流作者の通弊ともいふべき一種の自信强く毫も他の批評を顧みざるのみならず反省の念に乏しく只管才に任せて作すること是れなり。其の律格と押韻とが屢々杜撰に流れたる當然なりといふべし。而して其の主題を擇ぶや亦た甚だ杜撰なりき或は他が物せる小說の筋を其のまゝに歌ひ或は一知半解にして或種の哲理を詠ずるなど識者の顰を買ふもの一二のみならず。さはれ一言すればブラウニング夫人は實に一世の才女にして鬼才ブラウニングの夫人たるに愧ぢざりし者なり。

其の他の詩人

テニソンとブラウニングとが第十九世紀後半の詩壇に日月の如く輝きし時尚別に幾多の明星ありて天の各方に燿けりき。中につきて最も著きをマッシュ、アーノルド、ロセッチ嬢、トムソン、クラフ、ロッカー、リットン等とす。

(一)アーノルド　マッシュ、アーノルドは詩人としてテニソン、ブラウニングに次ぎしのみならず批評家としても一世に推重せられたり。現今に及ぶまでアーノルドを批評する者に二派あり一は彼れが散文を推重して詩歌を貴ばず一は彼れが詩歌を愛でゝ散文を珍とせず。兎も角も彼れは兩方面に秀でたり就中詩人として世に知られしは散文家としてよりも二十年の前にありき。アーノルドは其の始め深くチルヅチルスを景慕し隨つて之れに私淑せしと深かりしは其の詩躰に掲焉たり。又ミルトンの風調をも學びたる跡あり。又半無意識にしてテニソンの影響を受けしとも少からず。而もテニソン、キーツ等がローマンス派の流麗華縟なる作に對しては反動し力を竭して別に新古詩派を建設せんと欲しき。一面

よりいへばアーノルドは所謂「正格」派に屬する者なりき換言すれば結構詩句の格法を重んじ辭を彫琢すると共に情理趣致の洗錬に勗めたりき。されば其の作の最も秀でたるものに至りては其の妙十九世紀詩人中第一に位すべき者もありしなり。思ふに批評と創作との兩才を兼ね具ふる詩人は古來稀なり之れを第十九世紀の詩人について見るに獨りコールリッヂはアーノルドより五十年代の前に出でゝアーノルドにひとしき學者にして兼ねて詩人としては寧ろ一等を進めたるものなりき而も其の自作自評はアーノルド程には嚴正ならざりき。スコット、バイロン、キーツに至りてはもとより正當の學者批判家にあらずシェリー、テニソンは又批判家たる譽れなかりき。或一派の徒がアーノルドを稱揚して九天の高きに置かんとするも其の所以なきにあらざるなり。自作自評して自ら勵むことはアーノルドの夙に實行せりし所なるが故にや其の初期の作既に見るべきもの多し。シェークスピアを歌へる十四行詩(ソネット)"Mycerinus" とふ六行一解の詩"The Church of Brou" 其の他"Requiescat," "Switzerland," "Strayed Reveller" 及び"Empedocles on Etna" (獨白劇) "The Sick King in Bokhara" "Balder Dead" "Tristrum and Iseult" "The Scholar Gipsy" の如き皆佳作なり。總じて短篇を佳とす是は十九世紀後半期の詩歌の特質なるが如し。中にも"The Forslaken Mermer"は觀念の深邃よりは思想の創新と興趣の饒かなるを以て著はれ"Dover Beach"は彼れが散文中の殊なる宗教思想を聲調めでたき韻語をもて表はしたるが故に名あり彼れは頗る追懐の詩を好みきナルヅナルス及びハイヂを歌へる者の如きは其の好例なり。就中『ホストミンスタルアッベー』は其の語意の莊重端嚴ミルトンが"Nativity Ode"に匹敵すと稱せらる。蓋し此の作ミルトンを聯想せしむるものあるは決して偶然にあらずアーノルドは常に詩題の撰擇に重きを置きて經營頗る力めたりしなり。現に彼れが曾て「詩題」に關して論じたる言に謂へらく「詩歌の貴きと然らざるとは全く主題の大小によるともいふべし些末の事を捉へ刹那の感想を寄せて之れを歌ひ以て一時の歡を買はんとするは是れ豈に最近詩人の通弊にあらずや。かゝる詩篇を取りて之れを推奬し兎に角に其の多からんを望む是れ豈に最近批評家の通弊にあらずや。百千の螢火は一月の明に如かず片々たる斗筲の小品朝に作せられて夕に讀まる爲す所果して幾何かある」と。此の言の過ぎたるは論なけれど兎も角

も彼れが作の最も巧妙なる者に至りては其の數割合に少きだけに)英詩の衆妙を盡したりしと稱して溢美ならざるもの間々あり。是れ彼れを好む者の彼れをテニソン、ブラウニングの上に置かんと欲し彼れを好まざるものだに其の人道(所謂大題目)發揮の功をたゝへて彼れに同情を表する所以なり。

(二)ロセッチ及びロセッチ嬢　マッシウ、アーノルドはもとチルヅチルスの流れを汲みて其の詩田に潅せし人なり而して彼のキーツ、テニソン一派がロマンチックの潮流に對しては力を極めて其の防遏に勗めしかば此の流れは爲めに方向を轉じて所謂プリラファエル的運動(Pre-Raphaelite Movement)の一潮流となり延いて今日の詩界に及べり。さてプリラファエル派の起りしは十九世紀の中葉にて當時はアーノルドを首めとして有力なる詩人批評家のうちにこれに反抗せし者も少からざりしが此れ等二三子の死後は其の志を繼ぐ英才なく而して新派の方にはロセッチ、モルリス、スヰンバーン等の名家出て中にもスヰンバーンの如きは今も尚存生せる程なれば此の派は遂に全勝を得現に英國詩壇の大半を占領す。

ガブリエル、チャールス、ダンテ、ロセッチ(通稱ダンテ、ガブリエル、ロセッチ)は一千八百二十八年ロンドン府に生れき。畫家にして兼ねて詩人たり彼れの詩篇は大抵彼のモルリス、スヰンバーン等の作に先導せられて世に出でしが實際を言へばロセッチの二人に影響せし所も尠からざりき。此の三詩人は全く同一の詩風を奉じて立ち以て一派の根抵を固めし者なれど流石に各々特色あり。モルリスは佛蘭西、英吉利の中古の詩風を慕ひスヰンバーンは廣く自國古代の作に其の摸範を求め而してロセッチは傳來の以太利文學の上に脚を立てんと試みき而も共に中古派に屬せしは明かなり。ロセッチが壯時の作"The Blessed Damsel"を取りて之れを見るに其の想を全くダンテが或節より取り來りてこれに中古佛蘭西風の快活と中古英國風の創新とを加へたるが如き跡歴々たり。否な彼れが作は概ね中古の荒唐なる思想感情に加ふるに十九世紀風の半ば神秘的なる幽玄の趣致を以てせしものなり。蓋しロセッチの戀愛は闇黒面なき戀愛なり。人間に於ける天道を鞏固にするもの是れ即ち彼れが戀愛にして斯かる戀愛は男女が形躰已上の美若しくは恒に「精靈に宿れる形躰の美」を相思するより生ずるものなり。而して其の精靈といふは皆中世以太利詩人のいへりしものに同じく最近英國の思想には既に跡を絶ち

しものなりしなり。實に彼れは最近の思想に對しては殆ど感ずる所なかりしものゝ如し十九世紀歐洲思想のほのかにも見らるゝ作は一生中二三篇に過ぎず。要するにロセッチが特質は其の作の繪畫的なるにあり其の中古の思想感情をスコットより一層深く詩中に蘇生せしめんと勗めながら尙十九世紀的幽玄の趣致を帶ばしめたるにあり其のコールリッヂ、キーツによりて一たび試みられ更にテニッンに至りて漸く成熟するに至りしロマンチック詩句及び語調を一層圓熟せしめたるにあり。

ロセッチの小妹は名をクリスチナ、ジョールヂといふ、今日に於けるロセッチ嬢が名は甚だ高く批評家は之れをブラウニング夫人に比して其の變化の多きと作の夥しきとに於ては彼れに劣る所なれど其の瑕疵いと少なく未練長舌の弊なく溫柔優雅なる點は彼の夫人に優るとなせり。兎に角大昨よりいへば英國女詩人(抒情詩につきていふ)中孃に匹敵するもの殆んどなしともいふべからん。要するに其の名作を收めたる "Collected Poems" 一卷は英國古今の抒情詩集中稀に見る所最も可憐にして情趣深き花籠にも喩ふべく孃が贈遺の餘香は今尙馥郁たる感ある なり。

(三) オショウヂシー及びトムソン　アリ、ラファエル派は今も尙ほ盛んなれども當時(今より三十年前)に於てはロセッチ及びロセッチ孃とモルリス、スヰンバーンとの外は其の派の作家中世に聞えたる者なかりしが尙仔細に該派中英才を探れば散文の名家を兼ねたるヂョン、シモンズ逸才の盲詩人にして其の名はたゞ朋友の間にのみ高かりしフィリップ、マーストン二十年間教會の僧官となりそれがため詩名中道にして滅ぜしホプキンズ及びオショウヂシー、トムソン等十數名あり。但しこゝには末の二家のみを略叙すべし。

オショウヂシー (O'Shaughnessy 一八四四—八一)は大英博物館の館員なりき。詩集三卷あり "The Epic of Women" (一八七〇出版) "Lays of France" (一八七二)及び "Music and Moonlight" (一八七四)是れなり。彼れは例のアリ、ラファエル派の夢幻詩想の極端を悅べりしがゆゑに其の作世俗に厭はれ「人間的興趣を缺けり」といふ批難を得て空しく其の生を畢へたり要するに其の詩のあまりにロマンチック風に馳せて荒唐怪僻となりたるは厭ふべしといへども尙ほ流石に樂てがたき趣味もあり。

トムソン　十八世紀の末に出でゝ『四季の歌』の作者として詩名を一世に揚げしヂェームス、トムソンと同姓同名の詩人にしてプリ、ラファエル派中最も異色の詩人なり。一千八百三十四年に生れき。彼れは不平の間に人となり不平の間に業を執り終始不平の歳月を送りて生を了へし詩人なり而して其の不平の精神はよく其の詩にあらはれたり。又夙に散文家として名をあらはし時文學を評せしがもとより殊なる素養あるにもあらず識見はた卓拔とは稱し難けれど着眼流石に奇警にして筆鋒もまた鋭利なりき。彼のゾラッドロウが主筆たりし"National Reformer"といふ雜誌にB・Vといふ假號にて屢〻時文評を掲げしものは即ち此のトムソンなりき。一千八百七十四年初めて"The City of Dreadful Night"といふ詩をものして例の雜誌に掲げしが顧るものなかりき後に出せる"Van's Story"はた冷遇の中に葬られき。かくして轗軻の間に逝るに及びて世人は遽かに其の作に注意し其の詩集は忽ちにして二三版を重ねしが作物いと少かりしかば今尚其の眞價を評定すると難し。"The City of Dreadful Night"は厭世的精神の一貫せる作也宛たる虚無黨主義の深刻なる作にして冷酷なる狂憤の語時に人をして悚然たらしむ而もところ〴〵華麗莊嚴掬すべき情致もあり。最後の作"Insomnia"亦た鬼氣あり。而して其の未だ幸福なりしころの作にはやゝ光明界に近きものあれど尚ほ狹隘一律にして不自然背理の悲愁あるを免れず。其の消極的絶望的なる神秘界の消息を傳へたるは彼のロセッチ嬢が積極的の神仙界を歌ひたる聲と相對してプリ、ラファエル派の兩面を代表せるものと評すべし。

(四)第二級詩人の重なるものを擧ぐれば

(一)タッパル　温厚の士なりき。未だ出版に及ばざりし詩篇數十ありいづれも短詩の模範とするに足るものなり。"Proverbial Philosophy"は傑作にして其の平易にして花やかなるところ尤も俗衆によろこばる。(二)テニッソンが親交の詩人アルフレッド、テニッソンが作"Poems by two Brothers"は其の二兄と共に作せしものなるが其の中長兄フレデリッキは今尚ほ存生し筆硯頗る健なりといふ。次兄チャールス(一八〇八―一八七九)亦詩名あり彼のテニッソンをして『インメモリアム』をものせしめし親友アーサル、ハラムもまた散文にも韻語にも名ありき。彼の「ストルリング」社を開きし散文家ヂョン、ストルリング亦たテニッソンが親友にして時々作詩あ

り常にテニソンの詩風を摸せりき。(三)トレンチ　其の傑作"Study of Words"は「學者的の詩歌中最も通俗而して通俗的なる詩歌中最も學者的なるもの」と稱せらる。彼れは重に中世紀のラテン文學中神秘端嚴なるものを英國に紹介することを力めたり。(四)トマス、ゴルドン、ヘーク　其の作世に多く稱せられざれど詩としては珍とすべきものあり。其の平生の主義に曰はく苟も完全なる詩歌と稱すべき詩歌は其の意義を理解するが爲めに讀者をして多量の知識を要せしむる底のものなるべからず。さりとて一讀して其の內包の一切が明々白々に讀者の眼に入るがよしとにはあらずたゞ智を以て謎語を解するに心を奪はれ詩を樂むの餘裕なきに至らざらんを要すと。彼れが作は此の主義を實現せるものといふべし。(五)エーツーン　William Edmonstoune Aytoun は『ブラックウッド雜誌』の重要なりし記者にして法律と文學との記事に名ありき。要するに小スコットともいふべき作家にして熱心なるトーリー黨兼ねて中古武士の愛慕者たりき其の抒情的想像は概ねこの性癖に制せられたる觀あり。(六)スバスモヂック派暫且の感動を本とする派即ち際物派)　所謂際物派の起原は何年なりきとも定めがたけれど兎に角十九世紀の

初めに起りしものなることほゞ明かなり。按ふに彼の定期出版物の隆盛に際して雜誌新聞紙等に珍事異聞を掲ぐること盛んになり而して之れを散文の雜誌に見るのみにあき足らで更に之れを詩に詠ずることを試みるに至りしや其の始めなるべきか隨ひて何人が其の最初の作者なりしか詳ならず。もとより詩としては取るべき價値あるにあらず其の長所はたゞ事の實際に近ぐして放膽の氣ありといふほどの事にて概ね巧遲よりは拙速を貴び一時の喝采を博すれば足れりとせしなり。今尙ほ存生し"Festus"の記者として名あるベイリー　Baily の如きも始めは此派に屬せりきといふ。一時此の派の牛耳を執りしはシドニー、ドーベルとアレキサンダル、スミスとなり。共に十分の教育もなく秀でたる詩學上の意見もなく衣食に追はれて筆を一時に執りしものゝ如し。ドーベルの作の取るべきは着想の異風なるにあり"Tommys Dead"は其の傑作なるべし。たゞ其の篇餘りに長く且つ詞調平板なれば讀過に堪へ難し。スミスは着想ドーベルに劣れども辭句は巧なり其の處女作"Life Drama"最もよし。此の派に屬せしものゝうちにて他にやゝ名あるは W. C. Bennet. William Cory (?—1892). W. C. Roscoe (1823—89).

William Allingham (1824—89). 等なり。

(五)クラフ、ロッカル及びリットン　アーサル、ヒウ、クラフは如何なる故ありてか當時上流の人々より「惡詩人」といふ號稱を得たりしかこは別に故ありての惡名らしく彼れが作は決して惡詩と稱すべきものにわらず其の "Qua Cursum Ventus" の篇の如きは諷誦三嘆措く能はざる名句に富めり。作全体に亘りて見るにクラフは十九世紀の懐疑思想に感染したりしわと歴然たり。蓋しクラフの出でし時は恰もフルードのいへる如く「オックスフォールドは信仰と不信仰との二氣が有爲なる青年の腦裡に旋風の秋葉を捲くが如く相追驅せし」中心にしてクラフは此の間に於て兩者の一に就くの輕忽にして危險なるを知り斷然中立してたゞ最も穩健なる道念に依賴して一身を修め以て靜かに大聖の降誕を待ちしが故に其の外觀一見甚だ卑屈なるが如く遂にセンツベリー等をして「彼れは信ずるの力を缺き反抗するの勇氣を缺きし」ものなる如く思はしむるに至りぬ。されどこは畢竟するに彼れが中心の頗る强健なりしが爲なるべし。ドウデンもいへる如く彼れが健全なる道念の底より出でたる詩歌は他の徒らに懊惱する青年輩に取りては一貼の安慰劑とも稱しつべし。たゞ惜むらくは彼れが心中には信仰不信仰の兩々相軋轢して火を發するに至らざりしが故に其の詩篇に於て壯絶快絶の觀を見る能はざりしとなり。其の "Latest Decalogue" の諷刺は頗る見るべく田園詩の朴茂また愛すべし。

フレデリッキ、ロッカル　は一千八百二十一年に生れき。一千八百五十七年初めて "London Lyrics" といふ作を公にせり。爾後多く作らず外に "Lyra Elegantiarum" といふ詞華集、詩歌と散文との雜著集 "Patchwork" とあり其の技倆はこの篇に於て見るべし。"My Guardian Angel" は短篇の逸話にして文致の簡潔雅馴なる同種中稀に見る所なり。

リットン　小説家として名高かりしリットン伯の子にて名をエドワード、ロバルトといへり。但し其の世に出だしゝ詩篇には久しく "Owen Meredith" といふ假號を用ひたり。其の政治上の生涯煩劇なりしにも拘らず詩歌の作頗る多し今一々はこゝに擧げず。

リットンが全作についての眞價は今なほ定まらず。其の作いと多きのみか諸種の

詩人の影響を受けて其の脉も種々なり。さりとて摸倣者とはいふべからず獨創の才も見ゆればなり。又批評家に擯斥せらるゝは俗受けを主とせるが故かと見れば世俗には寧ろ高尚に過ぎて悅ばれざる趣あり。隨うて批評は紛々たれど要するに彼れが聲價は其の眞價よりも下にあるが如し其の長所は第一彼れが詩に抒情詩として得難き實際的(リアル)眞誠的(コンスタント)不易的の質あり以て其の詩脉の過麗なる缺を補へり。第二其の獨得の獨語風の話說なりこは他の企て及ばざる所にして後には一變して寓言風となりしが若し初めより終りまで此の詩脉に從事して此處に其の脚を立てしめば其の名聲或は今日の如きに止まらざりしならん。

(六)モルリス及びスヰンバーン　ヰリアム、モルリスは一千八百三十四年ロンドンに生る處女作を"The Defence of Yueverere"といふ傳奇風の短篇を集めたるものなり。例のリセッチ風にブラウニング風の獨白脉を雜へたるものなり。篇中ブラウニングにひとしく晦澁の個處も少からねど又一種の妙味あり。モルリスが世界及び人間に對する當時の感想の最もよくあらはれたるは"Haystack in the Floods"の篇中にあり。七年の後"Life and Death of Jason"と題する長篇の物語歌をものし、こゝに全く其の詩脉を定め遂に程なく彼の最大作"The Earthly Paradise"(『地上樂園』)を作するに至りき。『地上樂園』は四長篇よりなる大作にしてチョウサルが『カンターベリー物語』の筋と頗るよく似たるものなり。こは作者も自白せし所なり。詩律もチョウサルのに同じく三種を用ひたり。さてチョウサルと異なる所は件の物語の間に劇詩的妙味を加ふる能はざりしことゝ其の當代の事件を詩中に取り入れざりしことゝにあり。卷中の物語は孰れも作者の創案にあらず或は古詩歌或は古傳說の中より得たるものにして通常人の見聞きて無趣味殺風景の囈語となせるものゝ中に一種の生命を發見しこれを化醇して生氣を與へ是れに衣するに典麗華纖の章を以てしたる也。而して此の長篇は話說の稱合ひ其の宜しきにかなひ押韻句法亦た頗る變化に富めるが故に讀者厭倦の情を催さゝるのみならずよく篇中の人物と共に夢幻の境に遊ぶを得。且つ作者は大に自然界を愛し戶內よりは寧ろ戶外に於て生活せし人なるが故に篇中こゝかしこ自然を歌へる所淸新快活の氣に富みたり。

モルリスの作は尙"The Story of Sigard the Volsum"及び"Hope and Fear for Art"の二著

あり『アセニアム』(雜誌)は此の篇を以てモルリスが最成功の作となし其の文章の強健なるところ其の結構の劇詩的なるところ共に『地上樂園』の上にありとなせり。後者は美術講話集(五回分)なり南歐の美術を推稱しラファエル以前の典雅高渾なる繪畫趣味を論じたるものなり。

アルゼルノン、チャールス、スヰンバーンはモルリスよりは三歳の弟にて同じくロンドンの人なり。十三歳の時の處女作"The Queen Mother" "Rosamund" (脚本)は共に一種の筆力を具へざるにあらねど筆路結構なほ未だたどゝし。同六十五年又劇詩"Atlanta in Calydon"といふを作す想形共に全く希臘風のものなり想像豐富シェリーに次ぐとの好評ありき。同年又"Chastelard"をものしき。蘇國の女王メリーを主人公となせる悲劇にして女王が冷淡荒淫の性格よく寫されたり之れが爲めに蘇格土黨の人々には頗る憎惡せらるゝに至りきといふ。翌年"Poems and Ballads"といふ詩集を出だしき。作者が彼の世間の批難に抗して美術は道德、宗教、政治以外に獨立すべきものなりと極端に論じて愈々物議を釀すに至りしはこの時の事なり但し當時の極端なる主義及び缺點は次第に後年に至りて緩和せられ若しくは除かれたり。一生中の最長篇を"Bothwell"とす同七十四年の作なり"Chastelard"の續篇として女王メリーの後日譚を劇詩体にものせる敘事詩なり篇一万五千行を以て成り登場人物重大なるもの數十人の多きに及べりあまりに長篇なれば舞臺に上らしむる望みなけれど人物の性格はよく現はれ殊に彼のフルードの史筆に基きて物せる女王メリーの如きは執拗酷薄にして又詭策に富めるところマクベス夫人の面影ありと稱せらる蓋し彼れが劇詩中の白眉なり。これより現今に至るまでの著作あれど今一々は擧げず。さて全体に亘りてスヰンバーンが詩を見るにシャーブのいへる如く「思想及び意義の深邃幽遠よりも衷情の華麗にして光炎ある」ところに其の長處は存するが如し。彼れが思想は到底ブラウニング、テニソン、アーノルドの深く且つ高きに及ばず否なプリ、ラファエル派中にてもロセッチ、モルリスの飄逸なるに及ばず。而して後年の作を取りて調査すれば第一甚しくボクトル、ユーゴーの感化を受けたること第二極端に小見を愛することと(スヰンバーンは始終動もすれば極端に陷れり)第三大に自然界を愛し殊に海洋を嘆美せしこと等の性質歴々たり。彼れは其の海洋癖を利用し以て其の詩調

の變化を扶けたり宜なりさばかりの長篇に於て讀者の毫も單調に厭くことなきや。實に彼れが詩は「意義の詩」といはんよりはむしろ「音調の詩」と名くべし。意義の上に於ては到底シェリーとも併ぶを得ずと雖も音調の上に於てはよくテニッンをも凌がんものありとすればスヰンバーンが詩歌の名聲は兎に角に不朽なるべし。

尙ほ說きもらせる第二流の詩人若干あれどこゝには省けり。

最近小說家

第十九世紀前半の小說家は新代小說家の先驅たりしには相違なけれど之れを同後半期に出でし小說家と較ぶるときは其の間顯著なる差あり何ぞや。前半期の小說家も何れも一世の英才にして其の作に玩賞すべきもの頗る多かれどよく觀れば時勢との關係流石に未だ親密ならず隨うて「第十九世紀前半期の英才」と特稱すべき點乏しく寧ろ「いつの時代に置くも差支なき」底のものたり其の然らざる者だに新代小說家の特徵を備へたるは殆どなし。一千八百五十年以後に出でたる小說家は是れと異なりいづれも時勢の推動と大關係を有しオックスフォールド派の運動、科學の勃興、敎育の普及、美術の重視せらるゝに至りしことクリミア戰爭後英國の再び大陸政畧に關涉するに至りしこと盛んに滊車滊船を用ひて大に貿易を興せしと濠太利及附近諸島の開拓印度騷擾(Indian Mutiny)の後東印度會社の權力の移動及び一般社會に於ける改進主義の發達等のごときは皆此等小說家に影響する最大なるものなりき。こゝには最も著明なるブロンテ、エリオット、キングスレー等數名の上のみを略叙して止まん。

(一)チャーロット、ブロンテ女史

清新獨創の思想と華麗遒勁の筆致とを以て新代小說の先驅をなしゝものをチャーロット、ブロンテ Charlotte Bronte 女史とす。"Jane Eyre" は其の一世の名作なりされども初めはこれを購ふ書肆なく纔かにスミス及びエルダー二氏の好意によりて出版せられ攻擊の聲頗る高かりしと共に讀者また頗る多かりき。外に "Villette" 等の作あり。

ブロンテが作のかく一方に於て攻擊せられながら一方に於て非常の喝采を得たりしは蓋し女史が作は新小說の先驅たりしによる。抑女史の出でゝ其の彩筆を

揮ひしは恰もスコット既に死してサッカレー尚未だ出でずスコットが摸倣者も概ね樣に依りて葫蘆を畫くに止まり讀者漸く其の千篇一律に飽かんとしヂッケンス一流の近代の家庭小說はた纔かに呱々の聲を揚げしに止まりし時にあり。女史が小說は此の過渡時代と新時代との間に架せる一橋梁にして實に女史が名をして不朽ならしむるものは一つにはかく新代小說の先驅たりしに因り一つには其の個有の特質の大に見るべき者あるによれり個有の特質とは女史が半世の閱歷より得たるもの是なり。其の傑作"Jane Eyre"に就きて見るに女主人公ヂェーンの性格の其獨白躰の文章に於いていみじく現はれたるは更らにも云ず「醜雄」ローセストルのごとき人物を描きてよく其の神に入りしものは皆其の閱歷より來れることを衆批評家の嘖々して止まざる所なり。女史が閱歷の其の小說を幇けしことの少小ならざりしやまた爭ふべからず。然れども第二流以下の詩人を利するものも害するものも双つながら閱歷なり某批評家もいひし如く女史をして若し尙十年二十年の壽を保たしめこれをして例の如く小說に筆を執らしめば其の名聲恐らくは今日の如きを得ざりしならん。何が爲めぞや。女史が閱歷は女史の爲めにほゞ其の用を盡し果てたればなり。女史が多少の創意を加へきといふ「醜雄」の性格の如きも沙翁の大才あるにあらずんばよく之れを再びすること能はじ況んや女史が筆は少妹エミリーが如き妖嬌を缺きたれば永く讀者の愛玩を持續する能はざるべきをや。

小妹エミリーが作また名あり(一時はブロンテ女史を凌ぎたりしほどなり)。概ね短篇にして其の描く所の性格はた廣からずと雖も創新の點に於ては其の姉に讓らず輓近小說壇の一佳什なり。

(二)ジョールヂ、エリオット

ブロンテがみまかりし一千八百五十五年の翌秋及び五十七年に於て"Scenes of Clerical Life"中の一篇"Auws Barton"とふ小說『ブラックウッド雜誌』に掲載せられき。著者はジョールヂ、エリオットとはマリアン、エヴァンスの假號なり。女史が此の匿名を用ひて作せしや其の作巧妙なりしが爲めに大に讀詩社會の好奇心を呼び起し作者の實名に就いて推測揣摩紛々たりき。獨もヂッケンスが烟眼のみ著者の到底女性なるべきこと及び万一男子ならば古來未

曾有の女性的頭腦を有するものならんと看破したりき。マリアン、エヴンスとは何者ぞ。

マリアン、エヴンスは一千八百十九年英國ミッドランド山間フーヂックシアの一邑に生れき。女史は後年スペンサルの紹介によりてジョルヂ、ヘンリー、リユヰスと相知り遂に彼と婚しき。リユヰスはもと哲學者にして科學的頭腦を有し亦た詩人的詞才に富み小説作者ともなり得べき資質ありき其の批評の眼識は最も犀利にして夙に其の妻の劇詩家的才能あるを認めしかば屢々勸めて脚本を作らしめんとせり。エヴンス夫に勸められて遂に年來の神興を驅りて一篇の小説を作しぬ"Auws Barton" はこれなり。引きつゞきものしたる "Scenes of Clerical Life" "Adam Bede" "The Mill on the Floss" 等いづれも時人の賞讃を博し英國空前の散文的女詩人として騷壇一人も之れを稱揚せざるものなきに至りぬ。此等の外に尙多くの作あり。

女史は一方に於て大に自由を尊びしと共に敬虔の念に富み剛毅なる丈夫魂と慈悲深き女性の情とを兼ね具へき。女史が朋友の驚きを顧みずして鰥夫リユヰス

と婚せしが如き俠氣將たこの間より起りしものなりといふ。

女史が著作は頗る多し詩歌論文飜譯等其の冊數殆ど小説に匹敵す。されど女史が眞價は要するにその小説にあり一千八百六十年より同七十年に至るまで即ちサッカレー既に筆を絶ちてヂッケンス未だ傑作を出ださゝりし間に於て英國小説壇中人意を强うするに足りしものはひとり女史ありしのみ。況んやヂッケンスの歿後に於てをや。"英國空前の女作家"といふも敢て溢美にわらざるなり。

エリオットが小説を讀みて何人にも明かに了解せらるゝは此作者に二方面あることなり而して件の二方面を代表せる作を "Silas Marner" と "Romola" とす。第一面の女史はよくユーモアの眼を以て些末の人事を洞視し其の奇巧を描きて巧みに人情世相の微を穿てり。"Silas Marner" はいふに及ばず "Scenes of Clerical Life" の各篇は皆よく此の種の技倆をあらはせり。此の技倆たる蓋し女史が小説に不易の價値あらしむるものにして亦女史が不幸なる半世の長日月閑靜かに人世の辛酸を味ひたる結果にして其の成功は女史が結構的創才のいみじかりしに因るといはんよりは寧ろ其の諷諧的觀察の精微なりしに因るといはんかた穩當の評

なるべし。蓋し女史は創才に豐かなりしにあらず寧ろ科學(若しくは準科學)を好めりしなり此の科學癖は遂に女史をして第二の方面を作らしめき。女史が科學に偏する傾向は女史が "Silas Marner" をものせし後更に一層著くなり遂に特別の蘊蓄によりて "Romola" を作するに至りぬ。女史の "Romola" をものして材を伊太利の文藝復興に取るや經營實に慘憺女史自らも「我れ此の書の稿に着手せしときは妙齡の處女なりしも其の脱稿の際ははや白髮の媼となりにき」といへり。女史が勞苦の大なりしを見るべし。センツベリー曰はくこゝに至りて女史の小說は活物にあらず。天才の創造にあらずして研究の製作なればなり。快通の逸作にあらずして苦心の修練なればなり。否なもはや觀察の成果にすらあらざればなりと。而して女史が此の研究の作は女史が近代英國を主題とするに及びて一層著くなりぬ。女史が後期の作は明かに或る「目的」を標幟としてものすることゝなりたり。即ち倫理思想は女史にとりて第一義のものたり感情と學理とは寧ろ其の左右に過ぎずされば女史の科學を研究せしや主と倫理の方面に於てし一に倫理のよく科學と調和し人情と調和したるものを得んとせんとなせり。而して此の研究の結果として女史は「世界に和樂なくしてたゞ安心あり」といふ結論に達したり。曰はく

> 世には(少くも現今の如き世には)眞の和樂なるものなし若しこれありとせばこれ其の人の心の淺薄狹隘にして世界大の悲痛を感ずる能はざるが故の迷妄のみ。心の大なるものは接觸するもの多し彼等は憐れ悲痛に接觸す。彼れの處すべき唯一の方法はたゞ自棄(セルフ・ディニアル)の安心(コンスタンス)のみ云々

こゝに於て女史は此の上の研究を無要とし(或は寧ろ研究に堪へず)其の所信に就きてこれを表白することを力めき。女史が後期の作は多くかくの如くして成りしものなり。女史はかくの如く世を哀觀せりき而して厭世觀に陷りしにはあらず。人間は殆ど必然的に罪惡に傾くものなりかるが故に毅然として罪惡に打克ち其の誘惑に堪ふる是れ即ち最高の德にして最高の勇なりといふ是れやがて女史が終世の確信なりき。女史は常に此の思想を以て小說をものせしなり。故に其の人物は多く缺點ある人物にして美德の標範たるは殆ど絕無也隨うてふと見れば女史が倫理上の主義と矛盾背馳せるが如く思はるゝもこれやがて女史の小說をして不朽ならしむる所以なり。女史は人間罪惡の必然なるを熟察し深くこ

れに同感し以て其の筆を執りしなり是に於て讀者は其の人物の缺點を知りて尚ほ其の愛すべきを感じ時には以て人間世相の實体を見得たるが如き感をなす。是れを倫理小說の泰斗たるリチャードソンに比せんに兩者共に小說に倫理的目的を置く兩者共に英國的なり而も前者は自己の感相を作中の人物に注ぎて之れを理想的ならしめ後者は作中の人物に自己を同化し自ら其の人となりて悲喜哀歡す。前者を主觀的といはゞ後者を客觀的前者を敎訓的といはゞ後者は心理的なるべし而も其の倫理的なるに於ては一なり。リチャードソン、エリオットとをしてかくの如く異同せしめしものはもとより品性の相異にもよるべけれど一つは明かに時勢の異同すなはち變遷に歸せざるべからず。讀者の人世觀の未だ哲學的ならざる時代に於ける倫理小說はリチャードソンの敎訓小說にして事足るべけれど讀者の人世觀の全く哲學的なる十九世紀に於ける倫理小說はエリオットの如き心理的のものならざるべからず。エリオット謂へらく今代の人士にはもはや敎訓の必要なし自ら思辯すればなり且つや小說を以て敎訓の奴となすは美術を賊するものと。是に於て女史は其の所觀の世相に從うて心理的に之れを活寫し讀者をして自ら人間の何者たるを覺らしめ以て自ら處世安心の最良法を知らしめんと欲しき。是れエリオットが倫理小說の特質にして亦た最近倫理說の特質なり。女史の沒後其の名聲は生前の勢ひに反動して頓に墜落したるの觀あれど公平に評すれば女史が倫理小說はもとより意義なきものにあらずまた其の小說的技倆の尋常ならざるは否むべからざるものなり。

(三) キングスレー

ヂョールヂ、エリオット女史と同年に生れ之れと同時代の小說壇に於て名聲相讓らざりしものをチャールズ、キングスレーとなす。風光畫の如きデヂンシァの州中にても最も明媚の一邑なる法敎師の家に生れ和照春の如き家庭に生ひ立ちし彼れは嚴格にして變化なきミッドランドの山中に生れて夙に蕭殺たる秋霜に惱まされたりしエリオット女史と共に各々其の境遇の特色を表せり。前者は平和後者は森嚴而も共に十九世紀後半の思想を代表す。

キングスレーは頗る多作其の種類亦た甚だ多く概ね劣作なし。最も初の著作は "Village Sermons" といふ平明流暢なる論文集なり。次ぎに "Saints Tragedy" といふ

悲劇をものしきハンガリーのセントエリザベスの事蹟を材とせるものなり科介變化に富み臺詞華麗を極む。其の詩篇の名高き者を擧ぐれば "Andromeda and Other Poems" "The Last Buccaneer" "The Red King" "The Three Fishers" 等なり。さて彼れが本領たる小說を見るに其の處女篇は一千八百四十九年に成りぬ題して "Alton Locke" 及び "Yeast" といへり。文躰結構共に圓熟せずして時に尙生硬露骨の個處もあれど一種靈活の氣あり當時英國を聳動せし勞働問題民權擴張問題等を捉へて具象的にこれが解釋を與へたる點に於て裕かに一家の風ありといふべし。是れより先きキングスレーは基督教社會派(クリスチャン、ソシアリスト)に入りてモーリス(Maurice)と相結び短篇を草して新聞雜誌上盛んに其の主義を發表し又 "Fraser's Magazine" の誌上に華麗の文章を以て文學上遊戯上其の他種々の方面より同じ主義を唱道せしが遂に彼の社會主義を描ける第二の小說 "Hypatia" をものし引き續き傑作 "Westward Ho!" を出だしぬ。尙 "Two Years Ago" "Hereward the Wake" 等の作あり彼れに對する評論は今尙紛々たり。

キングスレーが社會上宗教上に關する意見は以上の著作の外公開の演說及び讃美歌論文集等によりて發表せられ何れも多少の聲譽ありき。キングスレー等の社會改善に熱心なるや其の小說に累をなし粗雜なる議論癖は每に其の筆に伴ふに至りぬ。其の議論たるや論理錯然趣旨散漫情あまりありて語隨はず而して他の攻擊に遇ふや憤激怒罵毫も假借する所無かりき。彼れが詩歌小說の如きも概ねこの目的を以て成れりともいふべし(ニュマンとの論爭の如きはこの失敗の最も顯著なるものとす)。

思ふに當時の風潮に徵すればキングスレーが筆を此方面に着けたる亦た必然の勢なりしなり。勞働問題は實際的に人世未來の大問題なり熱誠燃ゆるが如き詩人にしてこれを研究するは敢て異とすべきにあらず況んやあくまでも實際的なる十九世紀の英國詩人に於てをや。此の問題たるや單に下級勞働者を煽動することを能事とせる一種の社會主義とは大に趣を異にせり。其の主導者は彼のモーリスにしてキングスレー、ラッドロー(Ludlow)等これを扶補し一千八百四十九年を以て一盟社を建てにき。「基督教社會派」これなり。謂へらく人間は凡て上帝の見孫なりよろしく基督を媒として相結合すべし基督教の正教として奉ぜられん

限りは彼の勞働者も相結合一致すべし勞働者も兄弟なり競爭を停めて共働せよと。該派の所說は實に此の如き單純なるものにしてカーライルは是れ粗暴なる凡神敎的大言と罵りたりしも其の所說の生命に至りては容易に奪ふべからざるものあり。基督敎の經典はこゝに至りて愈々人間に密接し又人間の肉躰と密接し陳腐の凡說と譏られしものも竟に一世の大問題となりぬ。實に當時英人中にても精神界の人間にして普通社會の人間たるキングスレーの如きは無く普通社會の人間にして精神界の人間たるキングスレーの如きはなかりしなり。かくの如くにして成れる彼れが小說は明かに其の特質を現はし爲に多少の瑕疵を釀しゝに拘らず彼れが天才は小說中の風景性格結構等にあらはれ當代殆ど竝ぶもの なき地に達しぬ。其の "Alton Locke" 及び "Hereward" 中の妙句は絶妙好辭と稱へられ就中前者のロンドン市中の勞働社會を描き又ケムゝリッヂの瀟洒なる風景を寫せるなどは爾後五十年間幾多の摸倣者をして茫然筆を投ぜしむるに足りき。"Yeast" は其の劣作に屬すと雖も尙センツベリーをして感情溢るゝが如く靈活の氣全篇に充實したる作にしてこの十分一の作だに尙ほ現今の小說界を動かすに足らんと激賞せしめたり。其の "Hypatia" の慘にして結構複雜なる "Two Years Ago" の妙句に富める "Hypatia" のバノラマ的なる皆人の稱して措かざる所也。而して "Westward Ho!" の如きは愛國の士氣を以て充實せる歷史小說にして著者が社會問題を離れたる小說的創才はよくこの篇にあらはれたり。

(四)アンソニー・トロロープ　は十九世紀後半に出でたる一派の小說家の泰斗なり。一生の作甚だ多く中には散逸せるも少からねど其の傑作と稱せらるゝものは多く『バーセットシヤア叢書』のうちにあり。トロロープが小說は嚴にいへば彼れが宇宙人間につきて感得することの深かりしが爲めに成りしものにあらで寧ろ彼れが殊なる境遇によりて諸種の人物に接して其の外部の動作につきてこれを直寫したるものなり。是れ所謂寫實小說の一派にして毫も理想の分子を含まざる純粹の寫實小說なり。其の世に行はるゝものたゞ一時の喝采を博ずるに止まり五年十年の後に至りて讀者のまた之れを顧みるものなきに至れるは自然の數といふべし。

(五)チャールス、リード、　リードは頓智滑稽に富み "Peg Woffington" "Christie

Johnston" "Hard Cash" "Griffith Gaunt" 等の作皆該博百出能く人の頤を解く然れども往々にして好惡偏局し褒貶宜しきを得ざりしかば時に讀者をして眉を顰めしむるもの「雜報的小說家」の名ありき些少の事實を種として咄嗟の間に能く其の詩趣を傳へたればなるべし。但し批評的眼光の微なりしが爲めに主題の高下を擇擇するに拙く隨うて可惜狂才も往々にして其の用途を誤りたり。

(六)ヘンリー、キングスレー、　チャールス、キングスレーの弟にして名聲一時は阿兄をも凌がんとせりき。感想はやゝ阿兄よりも微弱なる所あるも諷諧の力は阿兄に優りたり。要するに作者としての性質は阿兄よりも健全なりき。惜むらくは天禀ゆたかならざりしのみか多くは生活の爲めに筆を執りしこと多かりしかば十分に騏足を伸ばすに至らざりき。"Geoffrey Hamlyn" "Ravenshoe" は共に一生の二傑作と稱せらる其の作大概は腹案粗漏にして首尾相應ぜず支離滅裂に了れるものに乏しからねど兄チャールスに同じく光景動作及び性格を寫すことに長じ且つ流石に十九世紀作者たるの特質を具へたり。

(七)スチーヴンソン　Robert Louis Balfour Stevenson (通稱 Robert Louis)　は第十九世紀の後期に出でゝ小說に於けるローマンチック風の新派を創始せし人なり。其の名聲の漸く著はれしは彼の有名なる "Treasure Island" を著はしゝ後にあり青年の讀み物としては、カピテン、マリアットの作以來第一に位し而して文學的價値は寧かにマリアットを凌ぎたり。かくて後更に一轉して神仙譚を趣向し奇想天外より落つるの妙作 "New Arabian Nights" をものしつゝ次いで續々其の作を公にせり。

スチーヴンソンの論文は流石に一種獨得の着眼の頗る見るべきものなきにあらねど論旨多くは散漫に失して堅實を缺けり。されば己れもまた論文の長所たらざるを曉り遂に專ら物語を作するに至りしが其の神仙譚は多少の缺點あるにも拘らず尙ほ十九世紀の奇什として長く後昆に傳ふるに足るべし。其のあまりに誇大に失し形容のわざとらしきは稍々厭ふべしと雖もこはスコット以下物語作者の通弊ともいふべきものなれば必しも咎むるに足らざらんか。只女性を描くとは頗る拙なりき。尙此の時代の小說家若干あれど一々擧げず。

最近評論壇

第十九世紀後半の文學界は他の點に於ても前半のと其の趣きを異にするが如く

定期出版物もまた從來のと異なれる所あれば批評界の變遷を敘するにさきだちて定期出版物の若干種につきて其の變遷の跡を點檢するの要あり。

當時とても舊地方雜誌又は月刊雜誌類が悉く廢刊したるにはあらず『エヂムバラ評論』及び『ブラックフォールド雜誌』の如きは十九世紀の中ごろまでは盛んにヂョールヂ、エリオットの小說キングスレー及びフルードの論文などを掲げて紙面の光彩陸離たる者ありきされど新をめで舊を厭ふは讀書社會のならひなり彼等は其の記事の質の如何は假き只管題號の新を喜び躰裁の奇を求めしかばこゝに自ら機運一轉して新刊諸雜誌の續出を見るに至りき。もとより此等多數の片々たるものゝ過半は所謂朝起暮廢の「三號雜誌」たりきと雖も此の間また自ら多少の改善と創意との加はれるものなきにあらずされば全躰よりいへば兎に角に前者よりは一段の進歩をなせしと共に一方に於ては印刷輸送等の便利も加はり隨うて紙面も擴張せられ價額も低減せられ讀者の數も增し遂には今日の如き狀況に達したり。此の間に於ける變遷の跡を尋ぬれば略々下の三段をなすべし。第一週刊六ペンニー新聞の流行。第二月刊雜誌の紙面擴張。第三新月刊評論の發行。週刊新聞の中最も著名なるを "Household Words"『家庭新語』及び "Saturday Review" (土曜日評論)とす。

『ハウスホールドヲルヅ』は一千八百五十年の發刊にしてヂッケンス主筆なり。大躰に於て『ブラックウッド』又は『ロンドン』と躰裁を等うしたり言はゝ其の發行の回數を增して價額を減じ論說の程度を低うして通俗的となしさて政治上の評論を除き去りたるに過ぎざるものとも見るべし。件の週報の長所は議論の通俗にして雜報文の輕快洒落なるにありき。但し中には『ロンドン』及び『ブラックウッド』掛持ちにて勤むる記者も交りたることなれば其の躰裁も全く獨創といふべからず且つ美術文學の論の如きはもと二三の學者に悅ばれんよりは寧ろ多數の好尙を高うせんことを所志とせしかば一世の評論壇を支配するには足らざりしもこれによりて多少文學的思想を社會に布及するの功ありしは事實なり。これよりこの週報に摸して成りしもの夥多出づるに至りたり。

『サタルデーレヴヰウ』は主義特質共に前者と異なり小說の如きは之れを掲載することといと稀なり。この種の週報にして著はれしもの既に二種ありきー は『エキザ

ミナル』と題しハンツ、フォンブランク、フォルスター及びミントー等相繼ぎて其の主筆となり當世紀の三分の二に亘りて紙面の光彩曾て衰へず。一は『スペクテートル』と稱し Renfoul（レントウル）の主筆となりし以來聲價はじめて定まり持續して今日に至りぬ。兩者共に改進主義を以て立ちしが『サタルデー、レヴウ』に至りては其の初めは貴族主義を以てあらはれいつしか Independent Tory（獨立トーリー）即ち Liberal-Conservative（自由的保守主義）を主張するに至りぬ。當世紀前半に於ける新聞紙の通弊ともいふべき個人の性行を褒貶することを避け其の主義持說に付いてのみ堂々論難する方針を取りしかば其の論說は少なくも公平眞面目の文字として一世の注目する所となり特に文學上の評論の如きは頗る勢力あるものとなりぬ。

『ハウスホールドヲルヅ』と『サタルデー、レヴウ』とにつぎて世に出でしを "The Cornhill Magazine" 及び "Macmillan's Magazine" とす。概して『ブラックウッド』『フレーザル』などと異なる所も見えねど價額の半減せると寄稿に知名の士の多くなれるとを以て見れば當時新聞雜誌業の如何に日進の勢ありしかを察することを得ん。

『コルンヒル雜誌』はサッカレーの發行にかゝりマッシウアーノルドの之れを扶け『マクミラン』はキングスレー兄弟の寄書を得て其の紙面の飾とせりき。

雜誌（マガヂーン）流行の餘勢は一轉して「評論」の興隆となりぬ。但し「評論雜誌」の興隆は政治思想及び文學思想の廣く社會に布及せりし結果なりと見るべきか或は單に當時佛國に流行せし "Revue des Deux Mondes" の摸倣と見るべきかは尙學者間の疑問に屬すされど兎に角に其の最初にあらはれし評論雜誌 Fortnightly（『二週評論』）が徹頭徹尾件の佛國の評論雜誌に倣ひたりし者なるは事實なり。『二週評論』に次ぎて出でし者を "Contemporary" 『當代評論』及び "Nineteenth Century" 『第十九世紀』とす。何れも謹嚴周密を以て知られて今尙持續せる評論批判の雜誌なり小說の如きは絕えて掲載することなし。週刊の雜誌にて最も名高きは "Athenium" にて刊行七十年の長きに及べり "Academy" これに次ぎて出で別樣の趣味を以て名聲を前者と爭へり。此等の雜誌にて文學上の評論として一時盛んに流行せしは古人の作を取りて評隲することにしてこれと共に古人の詩選を取りて其の特質を論ずることも盛なりき。

さて此等の雜誌新聞紙にたづさはりし批評家中其の著名なるものを擧ぐればヂョン、ポルソン、クリッカー及びエブラハム、ヘーワード、ジョールヂ、ブリムリー。ヘンリ、ランカスター。ヲルタル、バジオット等中にもブリムリーはテニソンが初期の作により早くも其の眞材たるを觀破しこれを世人に紹介せし炯眼の解釋者にしてランカスターのサッカレーに於ける亦たこれに同じ。バジオットは多才其の評論は政治、經濟、文學、宗教に亘りて餘す所なし中にも復古主義とローマンス主義との中間に脚を立てゝ仔細にヲルヅヲルスが詩能を論じたる一篇の如きは最も名あり。其の他の文士にては博士ヂョン、ブラウン。ヂェームス、バンヂー及びアーサル、ヘルプス等皆名あり。

マッシウ、アーノルド　其の一生の經歷と詩人としての特質とは前文既に略說せり。其の批評の論文の初めて世に出でしやオックスフォルド大學の哲學教授が所論として直ちに世人の注目推重する所となりき。此の時諸雜誌の爲めにものせし評論の文は同六十五年一冊子となりて出版せられき。有名なる "Essays in Criticism" 『批評論文集』是れなり收むる所九篇何れも文學に關するものなれども所論博大科學、宗教、美術、音樂等に亘り前人未冒の卓說頗る多し。アーノルドは詩人として

は極めて小心翼々の人にして改削又改削寧ろ用意のあまり周到なるに失せしが如き觀ありしが論客としてのアーノルドは殆ど別人の如く直往獨斷なりき。されば着眼は甚だ奇警にして人をして發明する所多からしむと雖も其のあまりに獨斷的なるや所謂獨り合點に流れて時に論理の順道を逸したる如き觀あり。

アーノルドが評論の有名なるものは以上の外に "Culture and Anarchy" "God and the Bible" "Literature and Dogma" 等あり。行文峭健にして奇氣横溢せり。アーノルドは晩年に至りて頗りに人物の評傳を試みしが中にもヲルヅヲルス論最も名あり。

ラスキン

アーノルドと同時代の散文壇に馳騁して相讓らざりし文豪をヂョン、ラスキンとなす。其の最初の論文にして最も名ありしものを "Modern Painters"（『近代畫家』）となす。其のはじめ此の書の第一卷の公にせられしや文學界一時大に振動せり蓋し其の論の斬新なると其の行文の鋭利巧妙なるとが一方に於ては激しき反對

論を喚び起し一方に於ては夥多の歎美者を生ぜしなり。此の間ラスキンは別に建築論を草して陸續出版しき "Seven Lamps of Architecture" (一八五一—五三)是れなり。ラスキンは彼のラファエル以前の畫風を主唱するアリ、ラファエル派の柱石にして一千八百五十年より同六十年に至るの間件の美術の典雅入神の致あるを說き熱心に南歐美術の趣味を英國に輸入せんと力めぬ。"Architecture and Painting" (一八五四)及び "Political Economy of Art" (一八五八)は當時の講說の草稿なり。引き續き "Unto the Last" "Munera Pulveris" Sesame and Lilies" "The Cestus of Aglain" "The Ethics of the Dust" "The Clown of wild Olive" "Time and Tide by Wear and Tyne" "The Queen of the Air" "St. Mark's Best" "Prae Trita" 等の著あり。『近代畫家』は主として近代の英國派の風景畫を辯護したるものにして風景畫に於ては今人は却りて古人に優れりといふ說を主張したるものなり。ラスキンの著を讀むものゝ著く感ずるは此の著者に二つの方面あること是れなり其の一つは詩人たる方面にして他の一つは批評家、美學家たるの方面なり。(彼れ又社會改革者としても多少思索する所ありしかどこゝに是れを略す)。ラスキンが著作は常に件の二方面より生れいでゝ美術の趣味と美の山來を世俗に傳ふるの効果を有したり即ち自然を觀察するの新眼光を廣く世人に授けたるなり。而して其の影響は決して繪畫社會にのみ止まらずして文學上にも社交上にも殆ど繪畫の何たるを知らざる社會にだに及びたり。

フィリップ、ギルベルト、ハマルトン曰はく

> 我が英國最近の白畫家(ホイスラー)にて其のいみじき者を銀語の詩人中に求めんかテニソンは盛し第一に位しシェリーこれに次ぎバイロン、スコット、チルヅチルス及びキーツまたこれに次ぐ。而してこれを散文の作家に求むるに至りては吾人はラスキンを以て唯一人となさゞるべからず(中略)ラスキンが散文を以て記叙論述をなすの技はあらゆる方面に於て驚歎するに堪へたり。

と。多少溢美の傾きありとするも英國の散文壇の殊に寥々たる時に方りて能く此の評を領せんもの他に殆ど其の人なきは明かなり。

ラスキンが美術に關する批評の特質にして兼ねて其の重なる價値は其の美術論以外に出でゝ人生論に及ぶ所にあり。換言すれば一個の無上なる範疇の種に倫理的と社會的と美術的とを結合する所實に彼れが審美論の長處にしてまた其の

短處なり。彼れは美術の批評家たると同時に道德論者たり彼れの美術品を品隲するや多少倫理的問題に干涉し人間の義務に說き及ばざることなし。所詮彼れは美術を以て單に道義に關するものたるにとゞめずして神聖なるものとし又道義を以て雷り善且つ眞なるものとのみせずして更に美なるものとせり。エルノンリーといふ匿名にて嘗てラスキンの美論を批評せしものあり曰はく「ラスキンは德義と美術とを相關係せしめて双方を神聖ならしめんと欲し却りて双方を毀し了んぬ。德義はこれが爲めに荒寥たるものとなり美術はこれが爲めに墮劣なるものとなりぬ」と

ラスキンは主張すらく「圓滿に美なるものゝ中には圓滿に善なるもの存す。かるが故に人若し眞に美なるものを知りて脫我の感情を以て深くそを愛することを得ば以て私慾の侵入を防ぎ其の生活を潔うするに庶幾からん。夫れ善と美とは一ならずして相背けりされど其の根底を探れば相親和すべき性質を具し相契合する所あり。然らば何故に人はこの缺陷多き人間界にありて美の研究に我が一生を委ねんとはするぞ。曰はく他なし道義を重んずればこそ美を研究せざるを得ざるなれ。蓋し道義をして愛重すべく若しくは鞏固ならしめんとせば宜り美を知るを以て足れりとせずしてそを研究し且つ愛好せざるべからず」。云々吾人がラスキンの說を讀みて首肯し得ざる點は屢々これあるべきも兎に角に其の自然の精神を解釋し人間と自然との間の契合を論じあらゆる高尙なる美術的作物より來たる靈妙なる聲を解釋し私欲を破し我慢を離ずる條に至りては其の深さと廣さとの點に於て英國過去の學者中に其の右に出づるもの稀なるのみならず廣くこれを海外に見るも前人の未だ言はざりし卓見少からざるを覺ゆ。されどもラスキンが美論はもとより系統の整然たらざるのみにあらず否其の所見は往々にして前後矛盾せり。彼れみづからも常にこれを自覺しながら尙且つ安然たりしものゝ如し。彼れ曰はく凡そ重要なる事柄は概して三面四面又は多々面を有す而して件の多面體の周邊を一歩づゝ取調ぶることは頑なる人々にとりては いとつらき業なるべし。予にとりては何事にもわれそれに關する說を尠くも三度ばかり案じかへたる後にあらざれば妥當なりと安ずる能はずと。彼れは彼の靈妙不可思議にして無數の方面を有せる美といふ怪物に對して果して幾回の考

察をか遂げたりし知るべからず。彼れが定義は到底曖昧にして捕捉し難きものなり。

ヂョン、リチャード、ヂェフェリース　パーノルド、ラスキン等に比すれば品位も所説も共に覆かに下級にあるも尙批評壇に於て若干月日の間一種の異彩を放てりしを者をヂョン、リチャード、ヂェフェリースとす。十八歳にして新聞事業に從事し"North Wilts Herald"とゝふ雜誌に寄書家たりしこと十年餘りさて後ロンドンに上り同七十八年に"The Game-keeper of Home"と題する小品文集を著しき。此の書は多數の讀者を得る能はざりしかど一たび讀みし者の間には稱贊の聲低からざりき。さて同種の作若干をものせし後轉じて半ば哲學の性質を帶びたる論文を著しゝが其の著は常に冷遇を受け數奇不平の間に病を得てロンドンを去り齡僅かに三十九にして歿しぬ。彼が名聲は忽ち其の訃と共に各所に喧傳し久しく塵底に埋葬せられたりし著書は今や定價の四五倍を以て數日間に賣り切れとなり諸種の新聞雜誌は爭ひて其の文脉を摸倣するに及びたり。かくの如き一時のヂェフェリー熱も忽ちにしてまた冷却し今や其の著書は空しく高閣に束ねらるゝに至れり。

蓋しヂェフェリーの詩人的性質はラルヴァルスよりは一層精微にして其の世界觀の哲學的なる亦たラルズチルスに過ぎ其の華纖なる散文を以て且つ論じ且つ歌ふや其の成功せるものに至れば頗る見るべきものありといへどもこれを以て彼のラスキンの妙辭に比すれば彼れは瓊葩綉葉の名花是れに名なく實なき枯木のかへり咲きに過ぎず。然れどもヂェフェリーも亦た一介の詞才なり其の派の論說と文脉とは饒かに一派をなしたり。

チルタル、ホレーショー、ペータル　處女篇を"Studies in History of Renaisance"となす。主題の面白きと脉裁の新しきと文致の巧なるとによりて大に讀書界に注目せられき。其の文章の華やかにして詩的なる所は或はラスキンにも過ぎたるべし。後ち"Marius the Epicurean""Imaginary Portraits""Appreciations"等の著あり何れも見るべし。"Marius the Epicurean"は就中價値あるものにして亦其の一生の傑作なり。ペータル初めは希臘の美術文學を好み殆どこれに溺れんとしたりしが後最近の思想好尙に感染し隨うて其の所說もまた一變しき。"Imaginary Portraits"は美術の批判よりは寧ろ美術家が製作の瞬間に於ける心機の妙用を描破せんと

せしものなり。此等の諸篇其の最妙の個所に至ればラスキンの暢達に加ふるにトマス、ブラウン及びアクヰンシーの巧緻を以てせるが如きものあり但し説の幽微に入り高玄に向ふ所に至りては到底ラスキンの精且つ大なるに及ばず。

チヨン、アディントン、シモンズ(John Addington Symonds)ハーダルと同一の派に屬して考説の精緻なる所は彼れに及ばざれども亦た彼の美論派の文士中錚々の名を博したる詞客なり。其の一生の名著"History of the Renaissance in Italy"(『伊國文藝復興史』)に今尚ほ多數の讀者あり。シモンズは南歐の文藝に精通せる人にして希臘の學藝美術及び伊太利なる文藝復興の事に付ては平生精査せる所ありこれに關する論説は屢々時の新聞雜誌に掲載せられき。

ヰリアム、ミントー文學美術の評隲に美學的觀察を用ふること少く且つ文章を詩歌的に修飾する事少かりしは前の二人に比して異色ある所なり。嘗て"Examiner"(雜誌)の主筆となりしが同誌の批評文はこれより驅壇に重きを置かるゝに至りき。其の小説"The Crack of Doom"は傑作なり。是れより先きミントー英國の散文と韻語とに關する史論をものし又彼の『エンサイクロピヂア、ブリタニカ』の爲めに若干の寄稿をなせり。其の特質は博く過去の文藝に通じて又深く最近の思想に感染せるにあり。其の失は批評眼のあまりに近代的に偏して作を廣く宇宙的に觀る能はざりしにあり但しこは殆んど近代美學派評論家の通弊なり。其の文章は平明順正よく其の言はんと欲する所を悉くせり。

哲學壇及び神學壇

文學を廣義に解して洽く思想感情の文章となりて表はれたる者となす時は哲學上の著述の如きは其の思想の方面より神學上の書籍の如きは思想感情の方面より文學上頗る重要なる位置を保つべく隨うて其の變遷發達の跡を討ぬる亦文學史家の要事なるべしと雖ども此くの如き文學史は純文學史はいふに及ばず哲學史宗教史などをも含むこととなり到底容易く企つべからざるものなれば本講義の如きも哲學史宗教史等とは引き離して彼の純文學を中心とし其の他は純文學と密に關係ある思想幷びに純文學たる價値ある著作につきてのみ論述せんとす。

隨つてこゝには英國十九世紀間哲學及び神學の著作家中純文學の方面より見て文章家と稱し得べき人々即ちミル、ハミルトン、ニウマン等を首とせる數人を畧述

すれば足れり若し夫れ此等の碩學が科學的事業を精察せんとならば須く哲學史及び神學史を繙くべきなり。

(一)ヂェレミー、ベンタム　ベンタムが道德政治及法律上の持論の中心となりたる者は其の利用の說也。彼れはプリストレーが陳套の語を用ひ最多數に最大幸福を與ふること」を以て其の目的となしき。而も其の多數といふ意義如何(例へば小人八十を占め君子僅かに二十なる國に於ては如何)所謂幸福とは何ぞや厚生利用の意義如何等の如き重大なる問題に就きては一たびも精說せず上に言へる如き漠然たる語に基く孟浪の說を建てしのみなりと雖も當時英國の社會は隣國革命の擧によりて人心頗る騷然たりし時なりしを以てベンタムが所說は此の機に應じて多少貢獻する所ありしや疑ひなし。文章は頗る華やかにして力ありシドニー、スミスが名筆にも伯仲すべきもの兎に角に一時多數の讀者を感動せしめたるは事實なり。

(二)ヂョン、スチュアルト、ミル　ミルが早年の作は多く新聞雜誌の爲めにものせしものにして彼れ自らも"London and Westminster Review"といふを發行して盛に其の

達筆を揮ひき。ミルは一たびも美文を試みしことなく常に哲學政治及び文學の評論をのみものしき。"A System of Logic, Ratiocinative and Inductive""Political Economy""Liberty"『功利主義論』及『コムト論』"Examination of Sir William Hamilton's Philosophy""Representative Govermeut"及び"Subjection of Women"等の名著あり。

ミルは論理學の史上に於ても明かに一席を占むべきものなるだけありて其の文の明快適切なる恐らく古今に比なく一たび其の根本思想に同意すれば其の何れの著を讀むも徹頭徹尾これに首肯せざるを得ざるの概あり。而して彼れの議論を進むるや件の論理を右にし左には修辭の方則を控へ之れを行るに天禀の文學的才能をするが故に步武極めて整々堂々たり。之れをマコウレーが文に比せんか其の明快流暢なる點に於ては兩者異なる所なしと雖も彼れが文章には全躰に於て多少輕烟の立ち罩むるが如き所ありて事理の脈絡頗る模糊時には其の思想の朦朧たるを示すが如き所ありと雖も是れは飽くまでも瑩然また洞然一塵も陰す所なし。即ちミルが文にはマコウレーの華麗なくデクインシーの濃淡なく又ラムの輕妙なしと雖も讀みて誤解すべからざる明晰と讀過の際不可言の快味を

覺ゆる暢達とは他の文人に其の例を見難きものなり宜なり今に至りても尙論客の範たるや。

(三)サリアム、ハミルトン　一千八百二十年サルソンとグラスゴー大學にて倫理哲學科の教授となるとを競爭して敗れそれより暫く『エヂンバラ』評論の寄書家となりて哲學上の評論を擔當せしが同三十六年に至り遂にサルソンに代りて大學に入り論理學及び形而上學を教授して名聲頗る高く其の教授筆記の如きは處々に傳はりてもてはやされき。生涯中著述といふは僅に"Dissertations"と稱する一篇の論集あるに過ぎず。一千八百五十九年に歿しければ彼の講義草案は友人の手によりて初めて出版せられき。ミルがハミルトンを論評せしは重に此の書に關してなりき。

ハミルトンの哲學を"Philosophy of the Conditioned"と稱す是れヒウムに反對してトマスリードが「蘇格土哲學を援助せんが爲めにカントを祖述して物せるものなり文躰につきては特にいふべきことなし。たゞ彼れはデクガンスヴー、コールリッヂ等よりは一層よく口耳曼風の研究を用ひたるだけに語辭文脈等頗る彼の國の科學者ぶりなる所あるのみ。

(四)ヘンリー、ロングサル、マンセル　は或人々の間には英國十九世紀中の最大哲學者なりと稱せられ又マーク、パッチソンよりは「仲買の親玉」(Arch-jobber)と毀られたれど現今に於ては兎に角に「精緻なる思索家哲學者の一人」といふ公評に其の位置略々定まりたるが如し惜哉彼齡甚だ長からず加ふるに大學校の事務多端なりしと生來著作に營々するを好まざりしとによりて著書あまり多からず隨うて彼れが知識の那邊にまで及びたるかを知るに由なし。マンセルは甚だ多方面なる學者にして滑稽の才もあり亦た世間智にも疎からざりき。是れ其の講義の大に學生に喜ばれ其の著書の學者をも益し且つ俗人にも解せられたる所以隨うて彼れの或人々より毀らるゝも亦た此の點にあり。學者として彼れの本領は自家の哲學系を立てゝ一派の開山たらんとするよりは寧ろ忠實に先人の哲學を傳へて精細に思想の變遷を敍說するにありしなり。要するに彼れは雜誌の評論家としては餘りに周匝明晰の頭腦を有し又哲學組織家としてはあまりに精細なる論理癖を有しき。即ち彼れは忠實精細なる哲學史家たるに過ぎず。彼れはこの種の記

事評論には最も適したる文章を有しき。其の短生涯中多く雜務の爲めに時を奪はれ爲めに首尾完備せる哲學史をものすること能はざりしは惜むべし。尙當時に出でし哲學書の文學的價値あるものゝ名を擧ぐる下の如し Frederick Denison Mourice の "Moral and Metaphysial Philosophy" William Archer Butler の "Lectures on the History of Ancient Philosophy" George Henry Lewes（ヂョリオット女史の夫）の "Biographical History of Ancient Philosophy" 等。

（五）ホエートリー及びホ・ヰウエル　歴史、科學、神學上の評論及著述の上に於て當時オックスフォールド及びケムブリッヂの兩大學より各々一俊才を出だしき。ホエートリーは明かなる相異の點あり加ふるに前者は秩序的教育を受けて議論文章共に雅正練熟後者は不規律に進歩せし才學だけに文字頗る粗硬なれども間々獨創の見に乏しからず。されども二人共に殆んど同時に出でゝ同じくヂョンソン風の獨斷家たり同樣の論法を以て歴史を論じ哲學を論じ宗教を論じ又た教育を論じき。

リチャード、ホエートリーはロンドンの人著作は多からぬ方なれどいづれも名あるものなり "Historic Doubts relative to Napoleon Bonaparte" は眼光の明透と論鋒の犀利を以て稱せられ教授筆記 "Party Feeling in Religion" はこれに次ぎ『論理學』及び『美辭學』亦た頗る名あり。彼れは科學にも哲學にも得意の數學を應用して頗る發明するところあり。其他の著書多かれど今一々は擧げず文章は蕪雜生硬讀むに堪へず。

哲學を應用文學と見做して其の名家を擧げ來たれば應用哲學と見做すべき法理學、經濟學の大家をも併序すべきなれどこゝにては企つべからざることなれば其の最も著はれたるもの二三の姓名と著述とを掲げて止まん。

ヂョン、オースチン "Province of Jurisprudence Determined" "Lectures on Jurisprudence" （『法學講義』）の著あり。

ヘンリー、ヂェームス、サムエル、メーン（一八二二—八八）"Ancient Law" "Village Communities" "Early Law and Custom" "Popular Government"（一八八五）等は名著なり文脉亦た波瀾に富みよく其の意を悉せり。

ヂェームス、フィッツ、ヂェームス、スチーヴン（一八二九—九四）著作は "Story of Nuncomar"

(一八八五)の他に別にいふべきものなし。"Liberty Equality and Fraternity"(一八七三)は其の集なり。父ジェームス、スチーヴン亦た有名なる評論家にして"Essays in Ecclesiastical History"及び"Lectures on the History of France"等の著あり。

さて神學の方面を觀るに當時に於て最も注目を惹きたるものは、オックスフォールド派(エピセンヂカル、ムーヴメントオブ)と稱する一派なり。こは半ば聖典派に反動し半ば改進派と自由派とに反對して起りたるものにして最も名あるものをしゥダー、キーブル及びニューマンの三氏とす。

(一)エドワード、ブーヴリー、ピゥジー Edward Bouverie Pusey　ニューマン、キーブル等と相結托して宗教につきて盡瘁すること數年著述少なからず。中にも"Sermons"及び"Eirenicon"は最も文學的興趣の深きものと稱せらる。文章は露骨又は晦澁などの評もあれど宗教上の所論にさへあまりに科學的ならんとする當時の風に抗して態と自家の見を樹て信仰と情熱とを飾りなく筆に傳へたる一種の文躰は見るべきものなるべし。

(二)ヂョン、キーブル(一七九二—一八六六)　キーブルの著作は"The Christian Year"の他に"Lyra Innocentium"及び詩集"Miscalaneous Poem's"あり。キーブルの詩才はロセッチ嬢に似て其の神怪幽陰に代ふるに廣大豐富を以てしき。彼れは又チルダチルスに影響を受けしこと少からずされど單に其の摸倣にあらずして別に一家の風あり。惜哉宗教家の通弊ともいふべき、歌うて風趣なきの難はこれを免るゝ能はず情火内に燃ゆれども嚴峻なる教理之れを包みて趣味索然たるものとなれり。さはれ彼れの作詩に從事せしことは大に彼れが詩歌の批評に資する所ありき。彼れは詩歌の批評家中當時第一の人なりき。

(四)ニューマン　ヂョン、ヘンリ、ニューマンはロンドンの人にして一千八百一年に生れき。彼れがハウキンズに嗣ぎてセント、メリー校の教師の職に在りし十六年間の事業はオックスフォールド派の歴史の骨子となれるものなり。彼れは當時の宗教に於ける智的方面をば其の儀禮的方面と共に一變する所あらんと欲したり是に於てか物議紛然として辯難雨の如くこの問題に關して世に出てたる冊子を蒐むれば殆ど一圖書館を成すに足るべしといふに至りき。而も是れに對する終局の斷案は今に及んで尚定まらざる有樣なり。

ニューマンが著の大部分はいふまでもなく散文の論説なれど彼れは韻語の作者としても文學史上稍かに一の地位を占むるに足るなり。中にも "The Pillar of Cloud" の如きは優美巧妙なる讃美歌にして宗教上の理想を詩化したる技巧ロセッチの上にありと稱せられて頗る人口に膾炙す。次ぎに "The Dream of Gerontius" は最も長篇にしてまたそが一生の傑作と稱せらる。韻語の作以前の美文にては傳奇的物語 "Callista" 及び "Loss and Gain" の二篇あり言辭に巧妙なる個處は少からねど作に教訓の目的を置きたる跡あまりにあらはにして餘情乏し。

其の著作の大部分を占めたる神學上の文章につきて觀るに各所にてものせし講說集十二卷セント、メリー領にてものせし『通俗說教集』八卷、雜誌四卷、論文四卷、歷史的斷片三卷、耶蘇教非議を反駁せる者及びセント、アタナシアスの飜譯合せて四卷及び雜種の辯難文六卷あり。其の最も不得意なりしは歷史にして彼れはたゞこれを重視せず他の史に據りて論を立つる者を見ては「好古癖なり」とて一嘆に附せしことさへありき。

ニューマン及びニューマンの徒は彼の十七世紀の清淨教徒に對しては些の同情を有せざりき。クラフの記する所に據れば人若しオックスフォールドに於て「ミルトンは大詩人なり」と立言して同意を求めんとするも恐らくは一人の之れに應ずる者なかりしならんと。彼等が清淨教徒に對する反感情はかばかりなりき。然れども此のオックスフォールド派の首領たるニューマンは或意味に於ては(或は眞正の意味に於ては)清淨教徒たりしなり。ニューマンの起ちて教導に從事せしや其の事業の標的は當時の世俗のあまりに卑俗なるを匡正して宗教の眞旨を振興せんとするにありき。所謂眞旨とは宗教の森嚴なるべき方面是れなり。然りニューマンの率ゐたるオックスフォールド派の舊教徒は實に新教的舊教ともいふべきもの若しくは十九世紀的新教といふべきものなりき。ニューマン曰はく「予はあくまでもリベラリズム(自由宗派)と戰かはんと欲す聖儀を非し聖典を議する我意放埒の一派及び其の一段進歩せるものと戰はんと欲す」。「夫れ心の靜平なると行ひの悠々たるとは彼の聖典を熱信するよりして得たる賜なり」云々。彼れが焦慮して研究したる問題は「如何にせば教會に自由派を生ずることなくして止むべきか」といふにあり。彼れは謂へらく有漏の人間は茫々たる宇宙の迷津に立てる丐兒の

み。吾れは何處より如何にして來りしかを知らず。日暮れて彼岸は遠し此の時に方り忽然として我が前に現はれ我れを撫で我を導くものは彼の大慈悲の御手なり誰れか之れを疑懼して殊更に行く手を轉ぜんとするものぞ。盡く聖典を疑はば聖典なきに如かず吾人の依從する所は此の唯一の聖典にあり黑膠々裡の大悲の御手にあり云々と。以てニューマン氏の所說が英國十九世紀の精神界の一側面として永く史上の地を占むるに足るを見るべし。

ニューマンは文章家としても一世に冠たりき。彼れは一派の文人の如く格を破りて文を修飾する弊なし意の赴くに隨うて筆を進むれども行文皆典據ありて一語苟くもせず讀者の易解を主として平順明正を第一とせり。されば文章中形容詞の數いと少く直喩隱喩證例の如きも動もすれば險に陷り易しとて常に力めて之れを避けき。されば一種の批評家はあまりに平明なりとて貶するものもあり しが彼れが天賦の詩才は始終其の文に現はれ温潤含光の趣致酌めども盡きざるの觀あり。加之主題によりてはよく此の平板を脫し曲折波瀾の妙を盡したる場合も少からず。

オックスフォールド派中の有名なる文士にはカーディナル、マンニング(一八〇八—九三)リチャード、ハルレル、ブルード(一八〇三—三六)アイサック、ボルアムス(一八〇二—六五)ボルアム、ヂョールヂ、リード(一八一二—八二)ヂーン、チャーチ(一八一五—九一)ヘンリー、バーリー、リットン(一八二九—九〇)等あり。尙オックスフォールド派と其の反對派との中間に立ちし神學者中にて忘るべからざる者はオックスフォールド及びウィンチェスタルの僧正たりしウィルバーフォース Sumuel Wilberforce(一八〇五—七三)なり。

さてオックスフォールド派の正反對の位置に立ちし人々の中にて稍々顯はれたる人三家あり。スタンレー、バッチソン及びヂョエットこれなり。

(一)アーサー、スタンレー Arther Henry Stanley(一八一五—八三) はアーノルドの感化を受けて其の傳記を著しゝ人なり。多年の研鑽を重ねてパレスタインの地理及びイースター、チャーチ(Easter Church)の變遷史を著しき。文章は流麗にして平易なり。

(二)マーク、パッチソン(一八一三—八四) リンコン大學の校長たりき。始めニューマンの人物に負ふ所ありきといふ。學識該博にして烱眼炬の如くニューマンを

助けて爲す所少からざりしがニューマンの南歐に航するに及びて漸く說を變じ遂に自由信仰を唱ふるに至りき。平常「書籍を著はさば最良の書籍たるべし」との主義なりしかば多く筆をとらず『英國文人列傳』の爲めに『ミルトン論』をものし『クオータリー評論』及び『土曜日評論』などに斷片を寄せたるのみなりしも其の學才は夙に知人間に推服せられたりき。行文流石に一家をなして雅馴雄健の名あり。

(三)ベンヂャミン、ヂョエット(一八一七—九四)　其の經歷は略ぼバッチソンに似て身は宗教大學の長たると同時にバッチソンにひとしく "Essays and Reviews" の記者の一人たり但しニューマン等が主唱せりし「宗教復古」(リリヂャス・チャンス)に對しては毫も同情を寄する所なかりき。その著作の大部分はプレトーの反譯にして文章はバッチソンに劣れり。オックスフォルド派の運動が其の頂點に達したりし時は蘇格土教會の分裂の衰運に傾きし時なりき。此の派に於て最後の運動の最も勢ひありしはトマス、チャーマースなり。著書 "The Adaptation of eternal nature to the Moral and Intellectual Constitution of Man" を首として頗る浩瀚なり。「論理よりは修辭に長じたり」といふ評はあれど其の修辭だにも文學史上に特筆する價値なし。

ヂドグード、アーヂング(一七九二—一八三四)　カーライルが親友なり。說教者としての技倆はチャーマースに及ばざりしかど文人としては遙かに其の上にあり。

科學壇の文才

さて此條に於て第一に擧ぐべきは彼の語原學、古典學者の人々なり。按ずるに中世の頃には所謂古典學未だ興らず殆ど一人の之れを專攻する者なかりき降りて文藝復興期に至れば苟も操觚の業に從ふものにして多少これを修めざるはなく就中彼のエラスマスの如きは(此の古典學の初期に於て)最も著名なる學者なりき。さてこれより一方には國文學發達し一方には希臘拉典の古文學盛んに研究せられ十七十八世紀の頃に至りては所謂古典學は文學と獨立して別に專攻せらるべきものとなりぬ。而も文學者は猶ほ一般に必ず此の知識なかるべからずといふ有樣にて勢ひ其の分離も全きを得ざりしが十九世紀の初めに至りて古典學は遂に全く文學と立離れて科學の部分に入ることゝなりぬ。下に述ぶるは分離以後の學者につきてなり。

まづ最も尤なるはヂャコブ、グライアント、ギルバルト、ウェークフィールド及びリチャー

ド、ボルソンの三家なり。

(一)ヂヤコップ、ブライアント(一七一五—一八〇四)は古典學に於いて當時全く遺却せられたりし神話を研究せし人にて當時比ひなき碩學なりき。

(二)ギルバルト、ウェークフィールド(一七五六—一八〇一)は多く古學に關する書を著し斯道を益せしこと尠からず中にも"Silva Critica"は最も名高かりき。

(三)リチャード、ボルソン(一七五九—一八〇八)は斯學者として最も貴重すべき明晰の思想と博大の記憶力とを有し其の文脉また得易からず何れの方面に筆を馳するも人後に落つることなかりき。然れども惜い哉生來の酒癖は筆と共に長じ正則の業務に堪ふる能はざりしかば著作の見るべきものなかりき。

以上三家の歿後オックスフォールド、ケムブリッヂ及びエヂンバラより各一名の古學者を出だしたり。(一)オックスフォールドより出でしはヂョン、コニングトン(一八二五—一六九)にしてホレース、ホーマー及びヴルヲル等の飜譯を首として南歐の古文學を紹介して文壇を益せしこと尠からず。其の多くの子弟を誘發して遺憾なく古學の堂奧を窺はしめし技倆と彼の死記死誦の弊竇を脱してよく古文學を現文壇に復活せしめたりし功績とは共に長く忘るべからざる者なり。(二)ケムブリッヂより出でしはヒュー、アンドリュー、ヂョンストーン、マンロー(一八一九—八二)なり。學者として力量はコニングトンの上にありベントリー、ボルソンなどの業を大成せしは此の人の力なりと稱せらる。或は"Lucretius"を飜譯し或はホレース、カタラス(Catullus)等を評論し其の他古學研鑽に屬する斷篇少からず中にも希臘拉典の詩歌を國詩に飜しゝ技倆は當時獨歩なりしなり。たゞ其の音調の眞を傳ふる能はざりしを遺憾となす。(三)エヂンバラより出でしはヰリアム、ヤング、セラー(一八二五—九〇)なり。其の著述は以上三家のに比して更に文學的趣味に富めり。"Roman Poets of the Republic"の著は同種の作中空前の名什なりと稱せらる。

さるほどに古學の研究これより一歩を進めて或はエジプトの古文學を研究し或はセミチックの古語を討ね更に印度を中心として東洋諸國の語學を修め兼ねて其の文學宗教等を傳ふるもの出づるに至りしが其の中にてヰルアム、ロバートソン、スミスの最も長じたりしは東洋の古典にして新約書に關する貴重の考證少からず。其の他"Kinship and Marriage in Early Arabia"及び"The Religion of Semites"の二

著あり文脉措辭少くも當時の二三流に列するを得べし。

さて理化學壇の文士に移らんにハムフレー、ダヾィ(Humphry Davy:(一七七八—一八二九)は先づ第一に紹介すべき人ならん。彼れは有名なる化學者にして炭坑用の安全燈を首め諸種の發明ありもと詩人コッドースの父なるクリフトンにて有名なる醫師の弟子となり其の助手となりし間に諸種の有益なる研究をなしぬると共に上流の人々と交り殊にコールリッヂ、ゾーシー等の一派の詩人と相往來して大に文學上の知識を得たりき。著書は"Salmonia"及び"Consolations in Travel"の二冊あるのみなれど何れも當時に歡迎せられ其の他の小片また文才の見るべきものあり。

ダヾィーと同時に出で數學、天文、地文等の學者にして文名嘖々たりしはメリー、フェーア、ブアックス(Mrs. Somerville)なり。其の自傳は筆致婉約にして流麗有趣味の記事に富むを以て稱せらる。されども科學界の泰斗にして文名また一世に冠絶せしはダーヰンとハックスレーに超ゆるものなし。

チャールス、ダーヰンは彼のエラスマス、ダーヰンとて十八世紀中韻語をもつて著はれ乘ねて科學の造詣淺からずして一流の進化論を立てにし人の孫なり。"Origin of Species"及び"The Descent of Man"は世界を聳動せし大著なり。ダーヰンが晩年に至りて人に語りし所に據れば彼れはいたく文學を好みことにシェークスピヤを愛誦せしが其の詩文を讀みしは老後よりは寧ろ少壯の間にありきといふ。そが文學の素養の最も文學と緣遠き學術研究の時代にありきとは奇ならずや。而して彼れが文才は英氣の旺然たる少壯時には其の勢を潛めて老成一家の見を樹つるに及んで始めて煥發せりき其の大著たる以上の二著及び"Voyage of the Beagle"等一として文脉の整調を見ざるはなし。實にダーヰンの文脉は明晰と强健とを旨として無要の脩飾を加ふることなし而も其の事を叙し理を論ずるや主客整然緊張宜しきを得たり。

ダーヰンより前に出でゝ早くもダーヰン風の進化説を"Vestiges of Creation"といふ一書に唱へ忽ち世俗に喧傳せられ學者より手痛き攻擊を受けし者あり。其の名はロバート、チャムバースといひてエヂンバラにて其の兄と共に多年通俗にして有益なる多種の書籍を發行して名ありし人なり。説の斬新なる文の感情的なる

いづれも當時多數の讀書社會を動かして力ありきチャムバース及びダーヰン等が說に對する攻擊はさま〳〵なりしが中に最も激しく反對せし者はいふまでもなく時の宗敎家なりき。而して"Vestiges"の攻擊者中にて最も力ありしはヒュー、ミルラー、(一八〇二—五六)なりき。彼れは半は宗敎的半は科學的なる見地を立てゝ根本的に件の邪說を覆さんとなしき。ミルラーは當時の英才にして觀察の周細を以て著はれ地質學を專攻しながらも侮るべからざる文才を有し多年新聞雜誌の編輯寄書に從事して論難に老練なりし人なればチャムバースの薄弱なる議論の如きは忽ちに挫け敗れ殆んど全く其の跡を絕ちし程なりき。然れども彼れは早年にして發狂して失せたりしかば其の著書の如きは"Old and Sandstone"の外多く見るべきものなくして了りぬ。されども彼れが通俗にして而も俗に媚びず明晰にして根柢ある論風と之れに協ふ文致とはいづれの編に於ても見るとを得。十九世紀科學壇の彬々たる文才の殿として餘業今に顯著たる者をトマス、ヘンリ、ハックスレーとなす。彼れが科學界の功業は彼の進化說を特殊の立脚地によりて確立不動の者となしゝを第一として其の外枚擧するに暇あらず。其の博覽强記にして根柢の廣く固きは更にもいはず其の斷案の力ありて確かなるなどは皆人の稱ふる所なり。彼れが批評家としての技倆は一千八百七十八年『英文家』"British Men of Letters"の爲めにものせし「ヒューム論」に於て知らる。引證該博議論雄大文脉もまた莊重正明警拔を求めず曲折を力めず而も事理透徹一毫遺す所なきは眞に一世の大家たるに耻ぢず。

脚本

第十六世紀このかたの英國脚本を通覽せる人は必ずや其が第十九世紀に至りて著き變化を經過したるを見ん。蓋し十八世紀以前には脚本と演劇と大柢相一致せりき即ち作られたるものは大柢演ぜられ演ぜられたるもの將た讀み物として も興ありしが第十八世紀の末より第十九世紀へかけては兩者次第に相分離し机上に巧妙の文學として持て嘶さるゝ脚本は舞臺にかけては成功せざるが多く舞臺に而白く演ぜらるゝ脚本は讀みて興味の索然たるを常とするに至りぬ。一言すれば脚本の中に演ずべき脚本と讀むべき脚本との二種を生ずるに至りたり。奇なる現象といふべし。今其の原因を尋ねんよりは先づ演劇脚本の實況に就い

て語らんに一千七百九十年より一千八百十年の間に於ける舞臺に上りし演劇の臺帳は一千八百十一年インチボールド夫人の手にて"Modern British Theatre"と名づくる十卷の冊子となりて出でたるが其の文學的趣味の索然たるとは言語道斷なり。いづれも文學的技倆の見るべきものなけれど臺帳の作者としての技倆は流石に幾分か參考すべきものありオキーフ O'Keefe の如きは蓋し其の尤なるもの。John O'Keefe (一七四八—一八三三)の作大小五十種もあれど多くは滑稽劇にして眞の喜劇の趣に近きものと單に一場の戲謔に過ぎざるものとあり。其の直接の文學的價値はいと少けれど何れも舞臺上に當りを博せしものなれば脚本として多少參考するに足るものなり。いづれも愛蘭土の風を帶びたる所其の特質なり。

さて前にもいへる文學と劇との分離に及べる端緒はベーリー女史 Joana Baillie (一七六二—一八五一)が作せし頃にありといふべし。女史は當時閨秀として一世に讃美せられし女にて其の作に多少見るべきものあり。概して女史が作は演じてよりも寧ろ讀みて趣味あり。其の悲劇の無韻律語は文字精練なれども熱誠の神

興に乏しく且つ多くは地方の特風と時代の特風とに偏しビザンチン、サクソン又は文藝復興等の一時一處の類型的人物を主とせるが故に個人の性格は漠として捉へ難きを常とせり。喜劇の作には時に無邪氣の可笑味なきにあらねどこれは た科白上の滑稽に乏しく且つ破綻和解の因緣を人物の性格に置かざりしが爲に興味深からず。要するに女史の一世に名を爲しゝは其の作の價値ありしが爲めにあらず文學の間歇期なりしが爲めなり。

かくて十九世紀の初めつかたより所謂技巧悲劇("Artistic tragedy (artistic comedy に對す)起り劇界に新現象(好現象とはいはず)を呈しぬ。其の由來を尋ぬるに氣鋭の作家等が當時の劇の或は價値なき佛劇の摸倣にとゞまり或は荒唐なる夢幻劇の類ひにして到底爲すに足らざるを感じ翻然遠く十七世紀に浮り直ちにシェークスピヤを摸範として之れに十九世紀の新思想を注ぎ以て一新劇を興さんと企てしに出でたり。蓋しローマン派運動の一種なり。さてかゝる失敗の引きつゞきしにも拘らず演劇をして(若しくはせめて劇詩をして)趣味多からしめんの企圖は念々に息まず如何にもしてこれを進め行かんと欲せしは時の明かなる傾向なり

き。こゝに於てか或はベードースが傳奇劇復興(エリザベス朝の人にあらざれば到底夢幻劇の成功覺束なきこと猶ほ我が日本の夢幻劇の新作の到底元祿享保の夢幻劇に及ぶ能はざるが如きものなるに拘らず)となり或は所謂學者劇となりぬ。ミルマンが"Fazio"タルフォールドが"Ion"などは學者劇の兩極端の標本なり。而もいづれ一つとして成功の著きものはなかりしかどタルフォールドが作は端なくもブラウニングが新作の先驅となりて彼の鬼才をして神韻幽渺たる"Stafford"及び情感深刻なる"Blot in the Scutcheon"を著さしむるに至りたり。後者はたしかに一名篇なれど演ずべき劇としては不具なる所夥しく到底抒情詩劇を以て目せざるを得ず。

かくて當世紀上半の文學と劇をして全く分離せしめしはシェリダン、ノールス James Sheridan Knowles(一七八四—一八六二)とす。其の作は當時殆ど確言視せられし劇場の實際知識なくては好脚本をものする能はず」といふ言と「文學の才に秀でし人は不思議にも劇場に意を得ざる世なり」と言ふを實證せり。但しこは反面より實證せしにて彼れが作は彼れが劇の實際知識を有するが爲めに劇場に於ひて成功

したる割に文學の才は乏しかりしなり。其が悲劇にて最も著名なるは"Virginius"にして作として最も善きは"Caius Gracchus"及び"William Tell"なり。而して喜劇にはなほ良き作あり"The Hunchback"及び"Love Chase"等いづれも例の Artistic comedy をやゝ改善せるものと見るべし。

舞臺上の成功はシェリダンに次ぎ文學上の價値もシェリダンに敵せしはバルワーリットンの脚本なり。"The Lady of Lyons""Richelieu""Money"等は蓋し其の傑作なるべし。他はほと〳〵言ふに足らざるものなり。

以上の作者はシェリダンを除く外は大抵專門の劇作者にあらずいはゞ劇の極衰期にいでしが爲めに多少の名をなしゝ門外文士なり。しかるにこゝに門外文士にして流れ〳〵て竟に劇界文士となりしものゝ一人ありブランシ James R. Blanche是れなり(一七九六—一八八〇)。劇の作は正劇より端物に至るまで頗る多けれどいづれも輕妙にして自由也隨うて文致精練ならざれど流石に棄て難き節あり抒情的文字に富む所其の特色也。此の外當世中脚本に指を染めし人々を擧げ來たらばミットフォールドよりテニソンに至るまで詩人小說家の名若干を擧ぐべき筈な

れど彼等の作はもとより其の本領にもあらず且つは劇壇を輕重せし作にもあらねば今は總て省くことゝせり。要するに

「十九世紀に於ては文學者の戯曲はむしなべて遥かに其の人々の詩歌小説の作に劣り詩歌小説に秀でざりし人々の脚本は文學的價値殆ど皆無なりき。」

總收

既に論述したるが如く第十九世紀の新文學は前世紀の末に起りし歐洲革命の所産にして其の萠芽は既に十八世紀の末にあり就中一千七百八十年より一千八百年までの間に此の氣運最も著かりしなり。此の間に出でし著作は單に文學上よりのみ見るときは價値多き者にあらず。所謂文學鑑賞家等は以爲へらく此の期の文學中ボスウェルが『チャンソン傳』バーンスが詩歌の數篇及び "Lyrical Ballads" 等を除くの他は亦た大に見るべきなしと。又所爲へらく小説のごときも大抵は荒唐荒雜稚氣を脱せざるもの多しと。さもあれ比較研究家、文學史家、國史家などの見地より見來れば流石に作の價値以外に幾多の取りどころあるをおぼゆ。例へばクラッブ若しくはクーパーをとりてゴールドスミッス若しくはトムソンと比較せば如何。更に之れをウォルヅヲオス若しくはコールリッヂと比較せば如何。かくの如く比照すれば當時の諸家が小品だにも別に新意義を生じ來る。況んやバーンス、ブレーが新聲をばソウシー、コールリッヂ、ウォルヅヲオスが初期の作と比照するに於てをや。所詮過渡時代の作の價値は作其の物の上に存せずして後の傑作の導火線たりし上に存す。

當期の小説界の狀況またこれにひとし當時の小説家が後代の作家を指導せし力は詩人のに劣りたれども其の苦心の度は彼れに越えたり。ベックフォードが物語はバーンスが詩歌と對すべくホルクロフト、ゴドヰン等の小説はクーパー以下の作と相照らすべし。而してスコットが小説上の新功蹟に至りてはウォルヅヲオス、コールリッヂ等の韻語上の功蹟よりも或意味に於ては一段困難なる事功なりしなり。且つや當時の韻語詩人にありては若し十八世紀の無氣力爛熟に厭きたらん場合には直ちに古に復りて其の師表を紀元前四五紀の希臘に求むるを得べく中世の伊太利に求むるを得べく學藝復興時代の各國に求むるを得べかりしが特り小説に於てはさる便宜を得る能はざりしなり。小説家の則るべかりしものは十八世

紀の自國の作物かさなくば佛蘭西、伊太利の物語類ありしのみ。而してこれ等の作はた新小說の創始に對しては殆ど何の裨益する所もなかりしなり。彼等は徒らに闇黑中を索模したりき。吾人のスコットの功を多とする所以は蓋し此に存す。評論壇、神學壇などの模樣も亦た詩歌小說壇の趣と大差なし。要するに此の二十年間は文學界全躰が未だ緒に着かざりし時なり。

そのころより今日までの間に詩歌界は變遷の五期を劃せり。其の第一期第三期及び第五期には創才ある詩人彬々として輩出し第二期と第四期とには彼等が名作相接踵して出版せられき。即ち第一期は一千七百八九十年代即ちスコット及び湖上派詩人を首としてシェリー、キーツなどの出生せし時代也。第二期はこれにつぐ十五年間にして第三期は一千八百十年より以後の十五年なり。第四期はそれより一千八百三十六年まで第五期はモリスの生れし年より今日までなり。

件の第一期に於てはローマンス(傳奇的詩歌)復古の勢ひめざましく中世文學の復活、佛蘭西革命の影響及び神秘的觀念の勃興等はこれを助けて力ありき。「自然に復れ」「新たに立脚地を自然界に求めよ」などいふ聲は先づ半無意識にクーパーとク

ラッブとによりて揚げられ全く無意識にバーンスとブレークとによりて助長せられ程なく"Lyrical Ballads"は出版せられ遂に確固たる精神的のものとなりてウォルヅヲオス、コールリッヂ、シェリー及びキーツよりスコット、バイロン以下ソウシー、カムベルレーハント、モーア等に傳はりたり。蓋し當時の詩壇は自然主義を以て一貫したりきといふも可なり。

さてこゝに注意すべきことあり何れの代にても名匠巨手の輩出したるあとには騷壇の景氣一時沈落するに至るかさなくば小手腕の作家が摸倣の作のみはびこるが常なるに當期に於ては毫もさるとなかりしこと是れなり。テニッソン、ブラウニング、アーノルド、ロセッチ、モリス、スヰンバーンの如き俊才がウォルヅヲオス以下前代名家の後嗣として一層の光彩を門戸に生じたりしは更にもいはずフルード、フロード、マコーレー、テーロア、ダルリー、ベッドーズ、小コールリッヂ、ホオン等の如き第二流小詩人すら各々獨得の技を有して他の摸擬を事とせず兎に角に一家の詩躰を持して此の間に參はりしは奇觀とすべし。彼等群詩人のウォルヅヲオスに對するはエリザ晩朝の詩人等のチョンソン、フレッチャーに對し若しくはスペンサーに對

するが如くならざるのみならず寧ろ新面を開き來つて英國の詩歌を富贍ならしめき。ベッドースの天上界を歌へるブレードの愼重なる社會歌フッドの痛切なる哀情歌ホオン、テーロア等の森嚴なる道德歌等くるめて評すれば容易に得難き吟詠集とたゝへつべし。さて次ぎにあらはれしテニソンとブラウニングとは共に詩歌の英才といはんよりは寧ろ神才（ジニアス）といふべき者にして全く同時に出で同行路を取り作詩に從事すると共に六十年且つ修養の爲めに久しく作を絶ちしこと其の修養の大効ありしこと爾來孜々として作詩に從事し終生之れを怠らざりしこと等に於て兩者全く同じかりしのみならず其の作詩の質に於ても二人の差はチューサー、スペンサー、ウォルヅヲオス、シェリー等の個々の間に存する差異の如き著大なるものにあらず。二人共に自意識して現在を歌ひ又未來を歌へり。其の差違は纔かに此の未來を謳歌せし分量と作詩の技倆とにあるのみ。かくも同樣なる天才の同時代に出で同一方面にあらはれて半世紀以上の文壇を飾りたりしは稀有の盛觀といふべきなり。

テニソン、ブラウニングの二文木が枝を交へ葉を重ねて一世紀間の文園を蔽ひし時幾多の名草芳樹其の下蔭に生長しき曰はくマッシュー、アーノルド曰はくロセッチ兄妹曰はくモリス、スヰンバーン曰はくクラフ、ロッカー、リットンの諸英等。

テニソン、ブラウニングを以て十九世紀の詩歌は其の頂點に達しこれより暫時また衰期に向はんとする徵あるは第一期第二期に皆無なりし摸倣といふ事の此の時に起れるを見ても知るべし。もとより大詩人の作は或は想に於て或は形に於て後代に影響すること夥しく現にウォルヅヲオスの如きは殆ど一百年間多數人（散文家をも含む）の間に大なる勢力を有しシェリーの如きも久しく盛んに摸倣せられたりしことあれど概して第一期第二期の作者は或一二家を標的とせず寧ろこれを階段として一層の高處に登らんと試みし概あり。然るにテニソン、ブラウニングに出づるに及びては十九世紀詩人の爲し得べき頂點ほゝこゝに定まり只管に二人を師表とせんとするもの續出しき。

この摸倣の卑しきを知り獨立して自家の感想を歌ふべしといふ主意を立てゝ健氣にも現はれし一派ありしが惜しや此の派のうち一人の深大なる詩想を有するものなかりしかば其の作爲せし所は本來の目的にたがひたゝ新事項を歌ふを事

とし新聞紙の雜報を韻語とせる如き淺膚鄙骨の詩を出だすに止まりき。そは十九世紀の中葉に暫く榮へし所謂「暫且感動派」これなり。

第四期に於て最も注意すべきは「先ラファエル」派の事なり。此の派の生起せし發端は美術界にあり。繪畫彫刻界に於ては今尙其の勢力盛んなり。而して詩歌界に於ける其の代表者はロセッチ兄妹モリス、スヰンバーンの四家とす。十九世紀後半に於てこの派の勃興せし伏線を尋ぬれば近くはテニソン遠くはスコット更に遠くはバーシーのローマンス主義にありといふべし。げに此の派の復古は復古と稱して當然なるのみならず更に一歩を高めたる復古なりきとも稱すべし。彼の單に趣向のみを古風にし言語のみを舊稱にするが如き復古は文學上より見て何の進歩ともいふ可からざる也。「先ラファエル」派の諸家はおの〳〵別に見る所を立てたり。ロセッチの多感にして感情燃ゆるが如きロセッチ嬢の宗教的にしてやさしくみやびたるは更にもいはずスヰンバーンの好辭流るゝが如くにして韻調の鏘然たるモリスの物語歌の美妙にして溫雅なる何れも近代の佳什にして上代にも稱れに見る所の珍品たり。要するに此の派の詩人は中古の詩歌の骨髓を取りて之れに加ふるに十九世紀風の精神を以てしたるものといふを得べし。中古の作多くは荒唐奇怪冒華燦爛趣向意表に出て九霄の天を穿ち九地の底に達する太晶宮の大迷路に入るがごときものありと雖も十九世紀の眼を以て見れば其の間に存する生氣は茫漠捉へがたく朦朧見るべからず爲めに彼の輪奐たる大厦も實物を見んよりは寧ろ鏡裡の影なるが如き觀あり。此の不可思議の大魔宮を十九世紀の英國に移し來り十九世紀精神を以て其の本尊となし更に新樣の裝飾を添へて以て文壇の一奇觀を築き做したる「先ラファエル派」の偉業蓋し特筆するに足りぬべし。

第十九世紀は實に詩歌の全盛期なり英國詩歌の全盛期なり。其の量より見るも其の質より見るも其の主題の範圍より見るも古今に通じ內外に亘りてかばかりの盛況に達したりしはあらず。試に "Ancient Mariner" より "Crossing the Bar" に至る九十年間の作物を見よ。其の價値の度の上より見るも世界中何れの國の詩歌が多くこれに凌駕すべき。其の詩風の上より見るもシェリー、ヴォルヅヲオスの如きは他國に其の比を見易からざるに非ずや。要するに詩歌は及ばん限りあらゆ

る方面に於て其の發暢を試みられたり其の成功せざりしは僅かに彼の劇詩を有韻にすることゝ深刻なる諷刺詩を試る事との二ありしのみ。

さて小説のことを言はんに十九世紀の小説は其の興隆の初めに於て大躰の標準なかりしが爲め五里霧中にありしことは前にもいへるが如し。十八世紀末二十年間及び十九世紀の初十五年間の中にて見るべきものは僅かにエッヂヲオス女史の作二三篇に過ぎず。スコットが韻語より散文に轉ずるに及びて近代小説はこゝにローマンス派の一風を加へ今に至りて絶えず。其の作"Waverley"の如何に成功せしか其成功の如何に急速に歴史小説を誘起せしかを歴史小説の如何に時風小説を誘起せしかこれと共に起りしシォドーア、フックが滑稽小説は如何この兩者の間に立ちしリットンは如何さて十九世紀の中葉に至りて歴史小説の火氣一たび熄み更にキングスレーのローマンスを以て如何に万丈の光焔を揚げしかこれと共にサッカレー、プロンテ女史ヂョールヂ、エリオット、アントニー、トロロープ、ヂッケンス等の起かし摸樣は如何更に現今に於て諸種の小説の如何に一層の小區分をなすに至りしか等は畧々これを説きおきたれば今これを重説せざるべし。只注意すべき

は詩歌の全盛と小説の全盛との關係なり。

詩歌と小説とは共に十九世紀英文學の大現象にして共に近世大革命の影響によりて現はれしには相違なけれど詩歌と小説とは元來其の勃興の動機を異にせる由を知らざるべからず。古今東西を問はず人の或境に臨みて詩情を催すは天性なれど人必しも他の詩歌を玩讀するを好むものにあらず。かるが故に古今東西詩歌は頗る多けれども其の後世に傳はるはいと少く且つ其の同時代に傳播する範圍また知るべきのみ。幸ひにして多數の讀者を得る作者だにもこれのみによりて生計を立つるは難し。然るに古今東西斬新にして趣味ある話説を好むは人の天性なりこれを語るもの又これを聞くものゝ多き言を俟たず而かもこれを組織して一部の小説となす技倆あるものに至りては割合に少數なり。此等の事情によりて詩歌と小説とを比較せんに前者は需要少くして供給多く後者は供給少くして需要多し。かるが故にホーマーは食を市に請ひリットンは一作數十萬金を得たりき。

以上は通じて見たる詩歌小説と讀者との關係なるが今これを英國の十九世紀に

見んか文明の進歩は日に月に著く教育は急に普及し國民の大かたは文字を解するに至り世間一般に生活の餘裕生じたりしかばこゝに娯樂を求むる心起り人々小説類を歡迎しき。かるが故に少しく文才機知あるものにして筆を小説に染むれば其の作としての價値は兎も角もあれ裕かに一生を支ふるを得たりき。こゝに於てや僅々五六十年間に出でし作其の數に於て過去全躰のに幾十倍するに至りぬ。此の間に出でたりし小説は必ずしも悉く拙劣なる急作にはあらず其の質に於ひて概して十七八世紀の幼稚なるものより進歩せるは更にもいはずこの五六十年間にすち次第に進歩せしは事實なり。要するに小説の作は今より大凡三十五年乃至四十年前の頃を以て極盛の期となす。ヂッケンス、サッカレー、ヂョールヂ、エリオット、アントロプロープ、キングスレー、バルワー、チスレリ等の名家は皆千八百五十年代に最も多く傑作を著しゝものにして彼の小説を以て文學の生命となせる佛國すら當時は及ぶ能はざりき。これより二十年が程のうちにはサッカレー、ヂッケンス相次ぎて歿しトロープもエリオットもまた大作をものせざるに至りキングスレー、バルワー將た漸く老衰するに至りしかば作の質稍〻下落せし觀あり。但し第二流の作の量に至りては寧ろ前代に倍せんとし世間の歡迎は愈〻加はり遂には單に書物としいへば小説のことと解する者も生じ者しくは文學と小説とを同一視する者夥しくなりぬ。而して一世紀の前に於て卒先して小説界の藥莽を闢き此の全盛の種子を蒔きしは主としてスコットの力なりといふも過言にあらじ。

かく詩歌と小説とが等しく全盛を極めたりし動機は如何。前者は全く自動的に革命の潮氣に感じて續發せしにて後者は重に他動的に社會の要求に應じて起りしなり。

次ぎに注意すべきは定期出版物の進歩なり。彼の新聞雜誌的小冊子の政治界などに頗る勢力ありしは遙かに前の時代にして當時は其の數もいと少かりしがアヂソンスヰフトさてはデフォーなどの頃は斯業大に衰へ一般に價値なきものと見做され揭載の記事なども纔かに"Robinson Crusso""Sir Launce-lot Graves"等の持て囃されしのみにて評論文の如きは一向に世の冷遇を受くる樣なりしが十八世紀の末に至り一葦水を隔てゝ佛蘭西革命の大活劇の演ぜらるゝや英國民は爭ひて其の事相を知らんと欲し新聞紙の勢力はこゝに一轉するとなりき。これにはま

た讀書社會の擴張などいふ內部の因緣の添ひしはいふを俟たず。かくて讀者の歡迎につれて發行者もまた成るべく記事に趣味を加へて讀者を誘ひつゞき起る他の出版物と競爭するに至りこゝに定期刊行物の亂發を來しき。時にヂヤコビン黨新聞雜誌を機關として政界の活動を始めたり。是に於て反對黨も亦た同じく新聞雜誌に據りて議論を闘はするとなりいよ〳〵世間の注意を惹きぬ。後程なく便利なる新聞紙條例定まり印刷術の進歩と共に價額も減じ其の隆盛加はりたり。さる程に定期出版物は文學の全類を集め詩歌小說の創作より歷史哲學宗敎科學の評論に至るまで大概の著作は其の單行する前に一たびは新聞雜誌に掲載せられずといふことなく毎日毎週毎月毎季等の出版物を通覽すれば文學の全豹は窺ひ得て遺漏なきに至りぬ。

定期出版物と文學との關係はこれに止まらず其の盛んなる頃は大抵の文士は皆これに關係を有するに至り小作家小評論家もなほこれによりて生活し彼のグラブストリートの文學ごろつきの如きは全く其の跡を絕つに至りぬ。或る意味よりいへば定期出版物の力が文學者の位地を高めしなり。而してこれら定期出版物に掲載せし文章詩歌には大かた匿名を用ふるを例としたりき。要するに定期出版物の狀況はすべて今の我が邦の新聞雜誌に徵して大かたは察知せらるべし。さて又或る意味に於て科學に屬すれどもまた文學に密接の關係ある(いはゞ純文學と科學との中間にある)歷史につきては十九世紀中には目覺ましき事もなし。さはれ其の研究の勞力及び其の未來の史家に資供せし便宜などにつきて考ふれば其の功必しも多く他の文學に讓るべくもあらず。ケムブリッヂ大學の敎授アクトン嘗て學生に語りていはく「歷史は今や歷史家と離れて獨立す」と。この語はよく十九世紀歷史事業の得失兩方面を蔽へる者といふべし。これを希臘羅馬の古へに徵するに有名なるシウシヂヂーズ、ヘロドタスなどの歷史は單に直接に聞觀せる事柄又は自家が感激せし傳說等によりて綴れる者にして今の歷史の眼を以て見れば到底不具なるを免れず。而して爾後數百年の後に至るまでも歷史は各國共に同樣の有樣なりき。是の如くにして成れりし歷史は史家が知識と感情との範圍內に於ける歷史即ち主觀の歷史にして眞正の客觀的歷史にあらず。十七世紀の末より十八世紀の初めへかけて英のギッボンは卓越の識見を以て史の

研究に佛蘭西派の風を用ひ周到綿密一に事實の採拾に從ひしが當時獨逸にても此の種の研究行はれ大勢茲に定まり遂に十九世紀に至りては其の極端まで推進するに至れり。マコーレーカーライルの著の如何に經營慘憺たるものなりしかを見ば明かならん。往時は荒唐無稽の囈語として棄てられし傳說記錄の類も今や史歌の最上級を占め出所不明の逸話すらも拾撫して博を衒ふものさへにいでき。傳說記錄の類はもとこれ杜撰なるが多し相互の矛盾もあり意外の過誤もあり之れを統べ之れが隱微を解釋し之れを有機体として生命を賦與するは一に史家の手腕を要す。然らざれば死記死誦の徒が千百の機械的考證竟に何の爲す所かあるべき。主觀に偏して詩歌的なりし往古の歷史は今や客觀に偏して無機無生のものとならんとしき。皆これ歷史攻究法の不備より來れるもの也。歷史が歷史家を離れて獨立するはよし而も歷史家は到底活人情活世相と離るべからざるなり。彼のマコーレーカーライルブルード等の史は幸にして如是死物とならざりしも尙餘りに同事物の考證に密なりしが爲めに十二年間の記事に四卷を費し五六十年間の歷史に十二卷を費したるが如き未だ時弊を免れずといふべし。

要するに十九世紀中の史的事業は過去の獨斷の風を矯めんが爲めにあまりに機械的に流れたりし憾あれども夥多の史家が銳意に研究し出だしゝ史料は今や積んで山の如く以て後の眞史家の出づるを待てるが如くなれば歷史の地盤はやゝこゝに固きを得たりといふべきなり。

十九世紀に於て最も振はざりしものは劇文學なり。もとより其の量より見れば敢て前世紀に讓らざれど臺帳となりて舞臺に演ぜられしものに至りてはいと稀なり。劇の形式上の工夫古大作の研究などは大に歩を進めたりしも新作に至りては大抵は凡上劇學者劇文學劇たるに止まりき。學者はさま〳〵に其の原因を求めて調停の運動もありしかどさせる結果もなくて今日に至りぬ。案ふにこは作劇そのものゝ困難なるによれるものにしてシェリダン以後英國に眞の劇詩家の出でざりしは主として之れに因るなるべし。

さて應用文學のいま一つなる神學につきて見るに其の振はざりしこと遙かに歷史の下にあり。單に出版物につきて見れば其の分量他種のものに讓らずと雖もこれを文學的方面より見れば其の價値いよ〳〵少く彼の讃美歌なども現今のに

至りては情高きにあらず趣清きにあらず辭妙なるにあらず否無味にして乾燥なるを常とせり。此の間たゞ僅かに歷史熱の餘炎によりて著されたる高僧の傳記、宗派分裂の由來若しくは教義の變遷等を錄せるものゝ讀むべきあるのみ。有名なるアーヂング、チャルマース等の如きも寧ろ人物として秀でたりしのみ著述の上より見て大なりしはたゞニューマン一人のみ。

さて又文學とは最も緣遠き科學の壇上に當時二三の文章家を出だしたりしは頗る奇なり。科學本來の性質より言へば其の說明に美文を要することはなかるべき筈なれど科學者の或者につきて見れば天性文學の嗜好に富みたる者あり若しくは其の文字の自らにして修辭の法にかなへるもあり。第十九世紀の科學者中にはハックスレーを首としてかゝる文章家鮮からず。

終りに科學よりは文學に緣近き美學家博言家等につきて一瞥するに其の聰明なる一二を除くの外は概ね蛙鳴蟬噪の徒にして未だ文園を飾るに足らざりき。英國近代の騷壇に此の輩の跳梁の盛んなりしは蓋し文學全盛の春風にふきあげられにし大路の塵埃ならんのみ。

つら〳〵現今の英文壇を見渡すに此の世紀の初めつかたに生れ出でし名家は大抵齳を易へ中ごろに出でし人々のみが現騷壇の牛耳を取れるあるのみ。彼の今尚生存せる二三の老作家を除くの外は滿目悉く黃茅白葦然らざれば狂花のかへり咲きに過ぎず。是に於て人或は曰はく現今の文壇は沈息せりと又曰はくこれ更に一轉するの兆と。沈息か轉機かは疑問ならめど兎に角に文壇の振はざるは事實なり。六百年間(文學隆盛期として未曾有の長日月)榮えにし文壇は更らに百尺竿頭一歩を進むるを得べきか否か。十八世紀末より十九世紀の初めへかけて起りしが如き世界的大革命の再び起ることなくして沈着なる英國人が大に奮發することあるべきか否か。彼の如き動機なく彼の如き素養なく彼の如き感奮激怒恐怖希望等なくして更らにかの如き革新運動を試ることを得へしや否や。これ現未の問題なり。

按ふに若しこの十九世紀をば前の文學隆盛期たとへばエリザベス朝若しくはアーン朝などと比較し或はこれを外國近代の文學と比較照し來らば興味は頗る多かるべけれど今はさる餘裕もなければたゞ各方面にわたりて過去全躰の文學と

あらましの比照を試むべし。

（第一）詩歌につきて見んにバーンス、ブレーキ、クーパルよりウォルヅヲオス、コールリッヂ、ソーシー、バイロン、シェリー、キーツを經てテニソン、ブラウニング、アーノルド、ロセッチ並びにモリス、スヰンバーンに至るまでの作は質に於ても量に於てもはたゝ其の範圍に於ても決して過去の何れの代のにも讓らず。（第二）小說に至りては過去全躰の作を集め來るも今の百分が一にも當らず。即ち純文學の重なるものゝ一なは總て過去の全躰の文學に勝れり。但し（第三）文學の最も大切なるものゝ一なる劇詩は不幸にして過去の匹敵にあらず。（第四）歷史の進步したるは明かなり。（第五）神學宗敎に關するものは過去に比して概して熱情と崇嚴の度を失へり。（第六）定期出版の雜種の散文に至りてはさま〳〵の方面に發達し變化多樣また前代に比なし即ち彼のモンテーン、ベーコンの代ドライデン、カウリー、テンプルの代若しくはアヂソン、スチールの代チヤンソン、ゴールドスミスの代すらも到底チヤドルズラム、ヴィルヤムハズリット、レーハント、トマスデクヰンスヰーの代に及ぶ能はず。マコーレー、ナッカレー、カーライルの代に及ぶ能はず況んやアーノルドラスキンの代に及ばんや。要するに散文の進步はいと速かなりき。さてかくの如く神速に發達し來れる今日の文躰は早晩また更に一變すべきか否かこれ趣味ある問題なり。セーンツベリ曰はく厭制政治の眞に止むは國內の最下級人がかゝる政治を怖るゝに至りし後なるべし。時尙の（ことに文學的時尙の）眞に變ずるまた國內の最下級までもこの時尙にあき足りたる後にあるべし。今や英國の社會文學の博播日に進み敎育の進步と共に讀者の數はいよ〳〵增加の途にあり現今の散文の一般國民間に於ける勢力は非常なりこの時に於て僅僅二三子の運動を以て文躰の變化を企てんことは實に容易のことにあらず云々とげにや英國の現社會が文學を歡迎するの度は非常なり。或は非難して曰はく「英國今日の社會はあまりに文學的なりと。あまりに文學的なりとは文學熱あまりに高きをいへるなり。蓋し文學的といふ美稱を有する現今の讀者の多數は敢て識高きやからにあらず眞誠の文學を愛するものにあらず。加ふるに作者の大かたはた理想高きにあらず技倆勝れたるにあらず。讀者は頻りに小說を渴望しひたすら其の最の多からんことを望み作者はこれに應じて多作し殆ど其の質を顧みず。最近二三十年間に

62
382

小作家の新たに起りたるもの實に千を以て數ふべし而もなほ社會の要求を滿すに足らず。彼れ等は一方に於て名譽賞讃を得一方に於て報酬と禮遇とを受く。既に花を手にし又實をも得一二批評家の喝棒は食ふを意とせざる所。誰れか評家の言を恐れ寛大なる社會の好意に背き危險なる理想の作を試みんとせんや。大勢是の如くなるが故に其の作は追々俗尙を標準とするに至り遂には批評の文字すらいつしか同樣の程度に引き下げられんとせり。嗚呼作家評家購讀者が彼のラスキン、ヂエフレーの眼を以て自然を見ラスキン、ベーターの眼を以て美術を見アーノルド、サンビューヴの眼を以て人生を見るに至るはそも何れの時にかわるべき。

狀勢かくの如き英國の俗文學が早晩著き變化を生ぜんは豫期すべきが如し。而も二十世紀の文壇に於てよく十九世紀にありしが如きめざましき大運動の起るべきか否かは世界的大革命の二十世紀中に起るべきか否かといふ問題と聯關す。こは容易に定むべきことにあらず。況んや二十一世紀の英文壇をや。

文四一七二

62
382

310414 000 0
62 382

英文学史

坪内雄藏 講述